中国におけるイスラム化の特異性に関する考察

北 村 歳 治†

Compound Islamization in China
―A Geographical, Historical and Ethnical Review―

Toshiharu Kitamura

This paper intends to trace the Islamization process in China from a geographical, historical and ethnical perspective. Geographically and historically, China had traditional open doors in the most south-eastern seaway region and the most north-western inland region. Ethnically, China has possessed a variety of ethnic groups and cultures, though characterized and often dominated by the Chinese proper and Sinocentrism. These elements have been reflected in its historically compound and geographically partial Islamization process.

The share of traditional Muslims and Uygur Muslims in China makes up about only two percent of the total Chinese population, but, being the most populous country, China's Muslim population is more than twenty million people, ranking the 18th in size in the world. While about half of the Muslim population have been naturalized through living many cities in China and have adopted Chinese lifestyle except for religious belief, Western provinces such as Xinjiang witness large concentrations of Muslims.

With the more than 1300-year history of partial Islamization, the religion of Islam plays now a noticeable role in China's politics and economy not only in Western regions but also many parts in China, carrying many implications for the Muslim communities of the world. However, its Muslim issues are in a state of flux due to evolutionally changing social circumstances in China. This paper pays attention to the historical channels between China and Islam world, in particular Central Asia.

はじめに

中国においてこれまで最も啓蒙的かつ合理的と考えられている共産主義は，20 世紀に中国及びその周辺地域の宗教観に大きな影響を与えてきた。その思想的傾向が今なお強く残る今日の中国では，信仰の自由は紆余曲折をへながら認められてきているものの，宗教は基本的に冷遇されてきた。公認されている宗教は，儒教・道教・仏教・イスラム教・キリスト教というように限定的であり，古来のシャーマニズム的なものは「迷信」と見なされ，また，「法輪功」等を含め新興宗教は否定されている。

中国では，伝統的な宗教とはやや異なるいわば現世における対処を中心課題とする儒教，あるいは戒律よりも自然観を中心とする道教が，その後に西方の中央アジアを経由して入ってきた仏教とともに，相互補完的な形で共存してきた。その後に入ってきたのが 7 世紀前半の（キリスト教の主流からは神格と人格とを明確に区分したとして異端とされた）ネストリウス派のキリスト教（景教）であり，7 世紀後半から 8 世紀以降のイスラム教だった。時代を大きく跨いだ 20 世紀前半に急速に中国を支配した共産主義の下では，宗教の存在は不安定だった。上記の主要宗教の信仰に対して原則的に容認

† 早稲田大学国際学術院（アジア太平洋研究科）教授

する路線が採られたのは，1966 年から 1976 年にかけて儒教を含め宗教を徹底的に否定した文化革命をへた後だった。1980 年代には，改革開放政策の下で新疆ウィグル（Uighur，または Uyghur）自治区をはじめ西北部を中心にイスラムが復興し，イスラム教育とともにメッカ巡礼も認められた。

上記の諸宗教のうち，イスラム教は，イマーム（礼拝指導者）やアホン（イスラム教育者）の 4 万余人を中心に，スーフィを母体とする教徒の数で，広義には 1 億 3,300 万人[1]，狭義には中国政府の 2010 年人口統計上の 2,300 万人となっている。尤も，この分野における調査で国際的に評価の高い Pew Forum に拠れば，2010 年時点で 2469 万人（台湾を除く）となっている[2]。このイスラム教徒の規模からすれば，中国は世界では 18 番目，インド以東のアジアにおいては 4 番目のイスラム国ということになる。しかし，比率でみれば膨大な人口規模（中国本土で 12 億人），また，漢族[3]の人口規模（11 億人余）の中で，2％を占めるのに過ぎない。その意味では中国におけるイスラム化はきわめて部分的なものとも言えなくはないが，歴史的及び民族的な観点からはきわめて興味ある問題が内在している。

以下では，イスラム教徒の 10 の少数民族を含む 56 の民族を抱える中国のイスラム教徒の特異な動きを，イスラム化の経路に焦点を当て，また，民族的（ethnic）な要素を考慮しながら，通史的な観点から考察していきたい。特に，10 世紀以降のトルコ系イスラム教徒等の影響に焦点を当て，現在の新疆ウィグル自治区におけるウィグル族と歴史的に重要な回族（本ペーパーでは，清朝以前については「回民」，現在の中国政府以降については「回族」とする）に注目する。なお，イスラムの 10 の少数民族は，2010 年の中国の統計でみると，回族（1058 万人），ウィグル族（1006 万人）の他に，さらに小規模のカザフ族（146 万人），東郷族（62 万人），クルグズ族（19 万人），サラール族（13 万人），タジク族（5 万人），ウズベク族（3 万人），保安族（2 万人），タタール族（1 万人以下）となっているが，本ペーパーでは東郷族以下は省略する。

なお，本稿は，早大「イスラム科学研究」第 9 号（2013 年）に載せた「中国における部分的イスラム化の考察」を中央アジアとの関係を重視して書き改めたものである。早大アジア太平洋研究センターの「アジア太平洋討究」第 18 号（2012 年）に載せた「東南アジアの非イスラム地域におけるイスラム」は，タイ及びベトナム並びに韓国・台湾におけるイスラムの経緯を取り扱ったが，本稿の趣旨は非イスラム国とみなされている中国に焦点を当て，特に中央アジアとの内陸的なイスラム化の経路を取り上げることに努めている。

いずれにしても，イスラム化は筆者の専攻分野ではない。アジアにおける非イスラム地域とみなされている諸国のイスラム化の問題は，筆者の市場移行国及び東南アジアにおける政策支援の中で抱いた関心に動機づけられたものであり，文献・参考資料の選択や専門家との議論は決して十分ではない

---

[1] この数字は，2003 年 9 月 13 日付のロンドン・エコノミスト誌が引用したものだが，あまりにも誇大であるとして中国関係者等から厳しく批判された。一般的には，次に述べる Pew Forum 等のデータが引用されている。

[2] Pew Forum については，http://www.pewforum.org/ を参照（データは，http://features.pewforum.org/grl/population-number.php）。

[3] 中国の民族の識別の際に使われる用語で，漢人ということもあるが，中国を離れた華僑あるいは移住先に定着した華人とは区別される。民族の識別の作業は民族識別工作と呼ばれ，清朝から中華民国にかけて「五族」とされていた民族数は，近年には漢族を含めて 56 となった。

ことは率直に認めざるをえない。この複雑かつ重要な問題に対する筆者の愚見にご叱正を頂ければ幸いである。

1. イスラム伝播の経路

1.1 イスラムとの接触

イスラム伝播については，古代から近代にかけて中東等からいわば隔絶された広大な中国おいては，その地理的経路が重要な意味を持っている。イスラムと中国の接触の端緒としてよく知られているのが，玄奘（げんじょう，Xuan-zang〈602～664 年，旅は 629～645 年〉）のインドへの旅の興奮がまだ冷めやらぬ唐の時代の 651 年に，イスラムの使節が海路経由で長安に到着した話である [4]。尤も，その後，特に 10 世紀以降は，イスラムの影響は次第に陸路経由が重要になっていった。

10 世紀以前においても東西を結ぶ陸路は存在しており，イスラムが中国に影響を及ぼす可能性はあった。例えば，AD709 年に（ウマイヤ朝〈Umayyad dynasty，661～750 年〉を背景に）イスラム勢力が中央アジア南端のアム・ダリア川（Amu Darya または Oxus River）を越えて中央アジアに入り，在住のソグド人を抑えてさらに東進し，サマルカンド（Samarkand）やフェルガナ（Fergana または Ferghana）に進出したのが 730 年代，さらに（アッバース朝〈Abbasid dynasty，750～1258 年〉の勃興を背景に）中央アジアの支配を確立していったのは 740 年代末，そして有名な（フェルガナ盆地の北の山脈を越えた現在のキルギスタン領にある）タラスの戦いで唐と対峙した 751 年という動きがあった。しかし，これらの動きは内陸経路を通ずるイスラムの本格的な東進には至らなかった。というのも，中央アジアの諸地域は，この時期には西南方からのイスラム勢力と東北方からのトルコ系諸部族が対立する状況であり，中央アジア自体がまだイスラム化されていなかったからである。

このように 10 世紀ころに至るまで，陸海両経路を通じるイスラムの影響は，イスラム商人の交易活動等に付随するものにとどまっていた。それは，中国に来訪した，あるいは定住したイスラム教徒にとって布教的な活動を行なうほどの余裕がなく，むしろ自分の信仰を維持するのが精いっぱいという事情であろう。また，陸路においては，交易の担い手がイスラム商人と言うよりもソグド人あるい

---

[4] 堀池信夫『中国イスラーム哲学の形成―王岱與研究』人文書院，2012 年 12 月は，その冒頭（pp. 23–25）でこれについて触れている。その他，土屋紀義「中国のイスラム教徒―歴史と現況―」『国会図書館レファレンス』（638 号）国会図書館，2004 年 3 月（pp. 38–63）に近年までの記述があるが，その中でも中国への最初のイスラム教徒の渡来について，「（651 年），ウマイヤ朝第 3 代カリフ・ウスマーンが派遣した使節の渡来が，記録に残る最初の中国とイスラム教徒と出会いだというのが，定説である。」（p. 43）としている。651 年の話は，多くの年代記等でも触れられている。また，その使節が皇帝に謁見する際に「神（アッラー）に対して跪拝するのみ」として跪拝しなかったという話も残っている。なお，http://en.wikipedia.org/wiki/では，ウスマーンについて“Uthman had the distinction of working for the expansion of Islam, and he sent the first official Muslim envoy to China in 650. The envoy, headed by Sa`d ibn Abi Waqqas, arrived in the Tang capital, Chang'an, in 651 via the overseas route. The Hui people generally consider this date to be the official founding of Islam in China. The Ancient Record of the Tang Dynasty recorded the historic meeting, in which the envoy greeted Emperor Gaozong of Tang and tried to convert him to Islam. Although the envoy failed to convince the Emperor to embrace Islam, the Emperor allowed him to proselytize in China and ordered the establishment of the first Chinese mosque in the capital to show his respect for the religion. Uthman also sent official Muslim envoys to Sri Lanka.”と記されているが，その根拠は必ずしも明確ではない。

なお，預言者ムハンマドの「知識のためには中国へも」（“Seek knowledge even in China”）の話は，クルアーン（コーラン）ではなく預言者の伝承（Hadith）に見られるが，その解釈は一義的ではない（http://www.sunnah.org/sources/hadith_utlub_ilm.htm）。

はその後の北方系のウィグル人が主流だったために，海路に比べればさらに遅れていたと考えられる。

それでも，海陸を経て中国に到来したイスラム教徒は，高い文化・商業ノウハウを持つアラブ・ペルシャ人であり，無視できない存在だった。彼らを含む胡人等[5]の活躍ぶりは国際的な唐においても顕著だった。漢族との生き生きした接触ぶりは，張承志「回教から見た中国」に描かれている[6]。唐の時代の対外政策は，「胡」，「蕃」を含め異民族・異教徒にきわめて寛大なものだった。交易とともに，結婚・混血がさらに結びつきを強めた。安史の変（安禄山の変，755〜763年）の時，ソグド人を父に，また突厥を母に持つ安禄山は，長安の東方の節度使（軍司令官）だったが反乱を起こし，その間，長安で動きが取れなくなった胡客の数は4000人にも及んだという。そして彼らは皆長安に強い愛着を持っていたという。

イスラムの影響が飛躍的に増大したのは，後述のように，西方においてAD1000年前後の中央アジアで起こった諸王朝の盛衰の中で強大となったイスラム勢力がタリム盆地（Tarim Basin）へ浸透したという事情がある（後述）。東方の海路経由においても，唐代以降のイスラム商人の影響と定住が進行していた。陸海双方において決定的に重要な役割を果たしたのは，13世紀以降モンゴル帝国を支えたイスラム教徒の活躍である[7]。陸路経由のイスラム教徒は，モンゴル帝国のテクノクラートとしての役割をも担う場合が多かったが，海路経由のイスラム教徒は主として交易・商業に従事する者が多かった。

なお，7〜10世紀の段階では，日本は607年に初めて遣隋使を，その後，630年以降は遣唐使を派遣したが，その関心は仏教を中心とする文物に集中していた。しかし，中国においては，この頃既に，南シナ海を経由するイスラム商人の文物，あるいは天山山脈と崑崙山脈にはさまれたタクラマカン砂漠を擁するタリム盆地周辺[8]からも，次第に仏教以外の文物が唐，宋に入り始めていた。しかし，日

---

[5] モンゴル時代以前に渡来したイスラム教徒は，「胡人」，「胡商」，「蕃客」と呼ばれたが，定住化した者はその後に漢化した。（「胡」は，漢以前には北方の匈奴，後には西域の民族の総称で，中国の北部や西部の異民族（遊牧民族）に対する蔑称だったとする議論もあるが，一般的にはソグド商人を指すと解されている。「蕃」も外来人に対する蔑称だった。）モンゴルの時代に中央アジア経由で中国に入ったイスラム教徒は，一般に「色目人」と呼ばれ，定住化した者もその後に漢化した。これら漢化したイスラム教徒の後裔は回民，回族等の名称で呼ばれる。

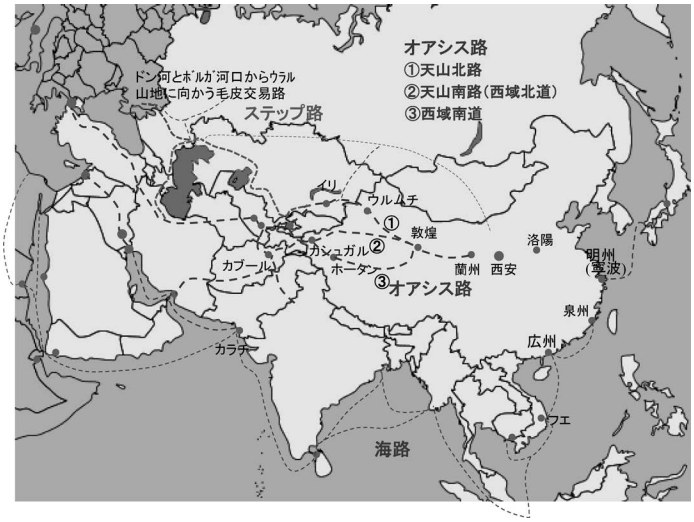
[6] 張承志『回教から見た中国』（1993年，中公新書）は，民族・生活史的な観点から唐代以降現在の共産主義政権の時代までを取り扱っている。中国におけるイスラムの初期段階については，第1章，特にpp. 5–26。なお，張氏の背景については，中国ムスリム研究会編前掲書の第11章〈pp. 81–85〉を参照。

[7] 堀池前掲書の第1章参照。なお，中国における明代までのイスラムの哲学史的な側面については，同書の第2，3章を参照。

[8] この地域は，後に東トルキスタンとも言われるようになるが，狭義の西域（せいいき，あるいは，さいいき）に相当する。この地域は，漢時代に西域三十六国と言われ，その後も東西の交易の要衝の地位を保持し続け，さまざまな言葉と宗教を持つ人々が唐に入る経路となった。なお，西域三十六国については，松田寿男『東西文化の交流』（2005年，講談社学術文庫）（これは，松田寿男著作集〈第三巻〉〈1987年，六興出版〉を底本としたもの）のpp. 48–62を参照。

西域は，狭義では，「清」時代までは「東トルキスタン」，中華人民共和国以降は「新疆ウィグル自治区」を指す。稀にウィグル・スタン〈Uyghur Stan〉ということもある。〈http://backspace.com/notes/2009/07/uyghurstan.php〉)。また，広義では，中央アジア5カ国，さらには地中海の東沿岸あるいはカスピ海に至る西アジアをも含む。

狭義の西域，すなわち東トルキスタンは，天山山脈と崑崙山脈に挟まれたタクラマカン砂漠を擁するタリム盆地周辺と天山山脈の東端を南北にはさむトルファン盆地とジュンガル盆地を指す。さらに狭義には，タリム盆地を指し，古代においては，東方から見て，①楼蘭国（後の鄯善〈ぜんぜん〉国），漠北路には②高昌国（トルファン），③焉耆〈えんぎ〉国（カラシャール），④亀茲〈きじ〉国（クチャ），そして，漠南路には⑤于闐（うてん）〈ホータン〉国，そしてタリム盆地の西端部の⑥疏勒〈そろく〉国（カシュガル）等があった。（以下，日本語読みは平仮名で，また，それ以外の読み方はカタカナで表示する。）



出所：http://mapsof.net/map/les-pays-asiatiques-blank の地図に筆者が加筆

第 1 図　東西を結ぶオアシス／砂漠路，山岳／ステップ路と海路

本がイスラムと接触したのは，事実上，明治維新以降のことである。

1.2　西域における経路

海路におけるイスラムの東進については，冒頭に述べた拙稿（「アジア太平洋討究」第 18 号（2012 年）の「東南アジアの非イスラム地域におけるイスラム」）に譲り，以下では西域からの経路に触れることにしたい。

西域における経路は，19 世紀になってドイツ人の地理学者リヒトホーフェン（Ferdinand Freiherr

---

[8] タリム盆地は，（隋・唐時代の突厥の後に現れた）トルコ系諸族の進出により，それ以前の定住者であった（ペルシャ系を含む）非トルコ系諸族は，次第にトルコ化されていった。当初のトルコ系諸族はシャーマニズムだったが，7 世紀後半以降はマニ教，最盛期を過ぎた 10 世紀後半には仏教，さらにはチベット仏教にも影響されたが，最終的には 10 世紀後半に西方から来たカラ・ハーン朝のイスラム教に大きく影響された。

トルファン盆地は，敦煌・玉門関の西北方にあり，後述する天山南路の要衝だった。玄奘は西域に入ってすぐにトルファンにある高昌国に立ち寄り厚遇された（626 年）。しかし，インドからの帰途につく時には（640 年），高昌国は既に唐に滅ぼされており，漠南路を経由して長安に戻った。その後，9 世紀にはウィグル族に，モンゴル時代には東チャガタイ・ハーンに，その後はアムール・ティムール（1336～1405 年）の支配下に置かれたこともある。（このトルファン盆地とその東のゴビ砂漠から見ると，モンゴルとチベットはきわめて近接しており，チベット仏教のモンゴルへの影響や 1913 年の蒙蔵条約の動きを理解しやすい。脚注 75 を参照。）

ジュンガル盆地は，9 世紀以降のトルコ系諸族の西方への出発点という意味を持っていた。このジュンガル盆地に成立した「ジュンガル王国」（1637～1755 年）は，後述のように，17 世紀から 18 世紀にかけて現在のジュンガル盆地を中心に活動したモンゴル系の遊牧民国家で知られている。その最盛期には，狭義の東トルキスタン全域のみならず，西北はイリ渓谷を越え現在のカザフスタンのバルハシ湖，東北はアルタイ山脈を越えモンゴル高原西部，西南はチベットの一部，東南は現在の中国の甘粛省と青海省の西部を含む大帝国となった。そして，清の乾隆帝と対決したが，1755 年に滅ぼされた。同王国は，宗教ではチベット仏教に大きく影響されたと言われている。最後の遊牧帝国と呼ばれることもあり，これを以って，遊牧騎馬民族は歴史から大きく後退した。（清とジュンガルとの相克の詳細は，尾形勇・岸本美緒編『中国史』〈1998 年，山川出版〈pp. 303-306〉〉，今谷明『中国の火薬庫』〈2000 年，集英社〈pp. 67-120〉〉，ジュンガル王国滅亡後の余波については，中国ムスリム研究会編『中国のムスリムを知るための 60 章』〈2012 年，明石書店〈pp. 223-227〉〉を参照。また，http://saveeastturk.org/index.php をも参照）。

漠南・北路は、多くの場合、西端でカシュガルとタシュクルガンに収束する。このタシュクルガンは、現在、新疆のカシュガル地区の郷級行政区にすぎないが、歴史的には、“*Stone Fortress* or *Stone Tower*”として（プトレミー＜Claudius Ptolemy, AD90~168年＞の“*Geographia*”ように）古くから知られていたとする説もある。(http://www.belfun.com/Amaury/tashkurgan.htm)

出所：http://maps.google.com/に筆者が加筆

第 2 図　カシュガルから西方への経路

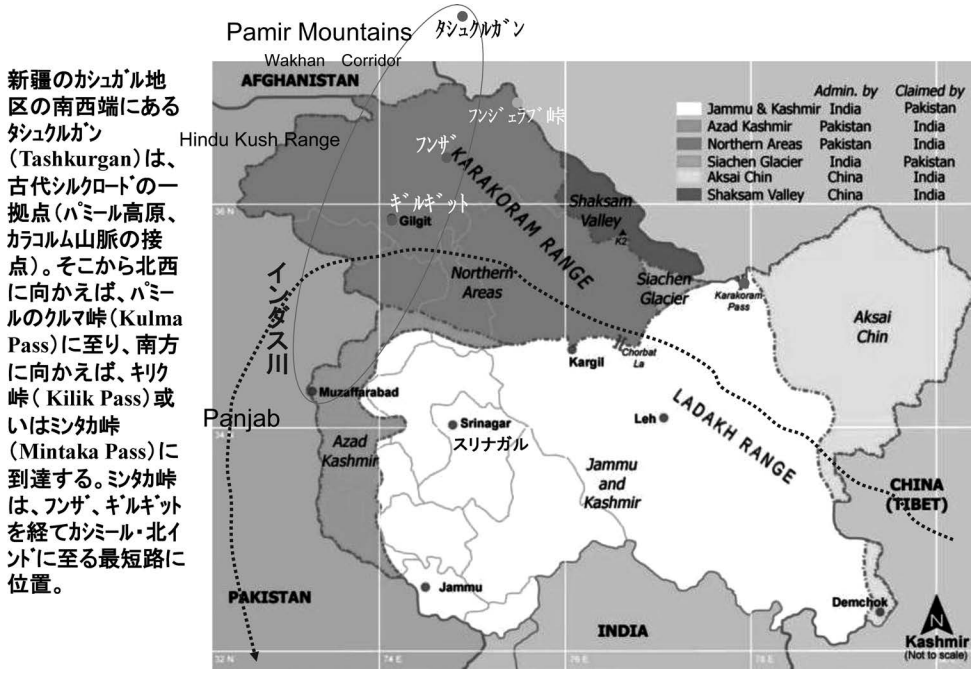
von Richthofen，1833〜1905 年）によって「シルクロード」と名づけられた（ドイツ語では〈Seidenstraße〉，中国語では「絲綢之路」）。それは，大別して 3 つに分かれるが，実際には相当入り組んでいる（図 1：「東西を結ぶオアシス／砂漠路，山岳／ステップ路と海路」を参照）。

第 1 は，歴史的に最も古いと言われるタリム盆地の南側の崑崙山脈の北側の山麓に沿うコースで，タクラマカン砂漠の南側を通るために，「漠南路」あるいは「西域南道」と呼ばれる。これは，東は敦煌，西はパミール高原（Pamir）となる[9]。古代においては，これが主流だったのであろう。尤も，細かく見れば，この漠南路の少し南側に（後述の）祁連（キーレンあるいはチーレン）山脈の西側をいわば裏街道のように青海を通る経路もあった。6 世紀初め北魏の時代に（官人である）宋雲は，このルートで西に向かいタシュクルガンをへてワクハン渓谷（回廊）あたりを通り西トルキスタン（の「エフタル王国」）に辿り着いた（宋雲行紀）[10]。

第 2 は，敦煌から西北に向かいトルファン（Turfan）等をへて天山山脈の南側の山麓に沿って西に進むコースである。これは「天山南路」（South-of-Tianshan Circuit），あるいはタクラマカン砂漠の北側を通るために「漠北路」と呼ばれる。この場合も，さらに西に向かう（西に向かった後にインドに向かって南下する）場合には，カシュガル（kashgar）からタシュクルガン（Tashkurgan）をへてパミール等に入るのが主流だった。しかし，カシュガルからパミールの北側に接する天山山脈の西南

[9] 松田前掲書で西域南道が詳述されている（pp. 83–85, pp. 113）。

[10] 宋雲行紀と後述の法顕伝については，長沢和俊 訳注『法顕伝・宋雲行紀』（東洋文庫，平凡社 71971 年）を参照。巻末において，それぞれの行路について詳細な解説が行われている（pp. 219–276）。これによれば，宋雲は AD518 年に僧侶の恵生と洛陽を出発し，ワクハン渓谷から西方に進み中央アジアのエフタル王国〈5 世紀半ばから 6 世紀前半にかけて中央アジア南部を支配した出自不明の王国。ササーン朝と突厥によって挟撃され滅んだ〉を訪ね，恵生はワクハン渓谷から南方に進んで北インドに到達した，と解されている（pp. 264–273）。



出所：http://en.wikipedia.org/wiki/File: Kashmir_2007.svg に筆者が加筆

第 3 図　タシュクルガンから西方パミール（Pamir），南方のカシミール（Kashmir）・北インドへの道

端に向かい現在のキルギスタンに入ってフェルガナに出るコースも知られていた。（図 2：「カシュガルから西方への経路」を参照。）

第 1 と第 2 の経路をとり混ぜて西に向かったのは，紀元後 400 年を前後して西域に旅立った法顕（ほっけん，Faxian，337～422 年，旅は 399～413 年）である。敦煌，楼蘭をへて（一端は漠北路を北上してクチャ〈亀茲または庫車〉に出たものの，その後は南下して漠南路を通り，タシュクルガンをへて 1 カ月をかけてパミールを越え，ガンダーラ（Gandhara）を通って北インドに入った[11]。（図 3：「タシュクルガンから西方パミール（Pamir），南方のカシミール（Kashmir）・北インドへの道」を参照。）

第 3 は，敦煌・トルファンまではほぼ天山南路と同じだが，トルファンからさらに北西に向かい，ウルムチをへて天山山脈の北側を通る「天山北路」（North-of-Tianshan Cirucit）である。後述のように，この天山北路は，いわば第 4 のルートとも言うべき北方の草原（ステップ）ルートにも通ずるものでもあった。これは，（スキタイ[12]や匈奴[13]を別にすれば）歴史的には新しく，トルコ系諸族が

[11] パミールを越える場合，アム・ダリア川の南側に出ることとなり一挙にガンダーラに近づくことができる。当時の経路の選択は複雑であり，タシュクルガンからワクハン渓谷を経由するコース，タシュクルガンから南下しミンタカ峠あるいはキリク峠を越えてインダス川流域に達するコース等も知られていた。

[12] 遊牧騎馬民族として名高い（古代のギリシャ・ペルシャを悩ました）スキタイ（Skythai）は，紀元前 7～3 世紀にこのステップ地帯の西側に勢力を張り，現在のカザフスタンから黒海の北側にまで活動範囲を持ち，（カスピ海北部から？）黒海の北岸の草原地帯にかけて強力な遊牧民族国家を建設した（BC3 世紀にクリミア半島の小国として消滅）。スキタイの特性については，杉山正明『遊牧民から見た世界史』（1997 年，日本経済出版社）pp.82–83，85–91 を参照。

西方に進出した9世紀以降に重要性を帯びてきたものと言われている[14]。尤も，玄奘は，「天山南路」から天山山脈を越えて天山北路に入った。インドからの帰途は，漠南路をとったので，玄奘の旅は上記の第2，3及び1の3つのコースを組み合わせたものとなった[15]。なお，第2と第3のコースは「西域北道」と呼ばれることもある。

1.3　河西回廊とソグド人

この西域における3コースを中国（中原）の側から扇の要（かなめ）のように束ねたのが歴史的に重要な「河西（かせい）回廊」（または「河西通廊」）だった。この地域は，また，一方では，南のチベットの東北端である青海（せいかい）省と，甘粛（かんしゅく）省の西北端が接する所に4000メートル級の山々が連なる祁連山脈があり，甘粛省サイドはその麓にあたる。他方では，北からはモンゴルのゴビ砂漠の延長が南に延びてきている。この南からの山地と北からの砂漠地帯が触れ合う細長い地域が「河西回廊」を形成している。

この河西回廊の西端は「玉門関」，「敦煌」，河西回廊から東南には酒泉，張掖，武威から，東南端の蘭州（甘粛省の首都）までオアシスが列をなしている。最西北端から最南東端まで，長さは約900キロ，幅は不規則な狭く長い平地となっている。この帯状の平坦な地域は，黄河の西にあるため「河西」になる。（図4：「天山北路，天山南路（西域北道/漠北路），西域南道（漠南路）とそれを束ねる河西回廊」を参照。）

この河西回廊こそ，タリム盆地と黄河中下流域の中原の地とを結ぶ（狭義の）シルクロードであり，1000年以上に及ぶ長い歴史の中で延々と生き伸びてきた交易ルート，文化ルートだった。秦・漢を

---

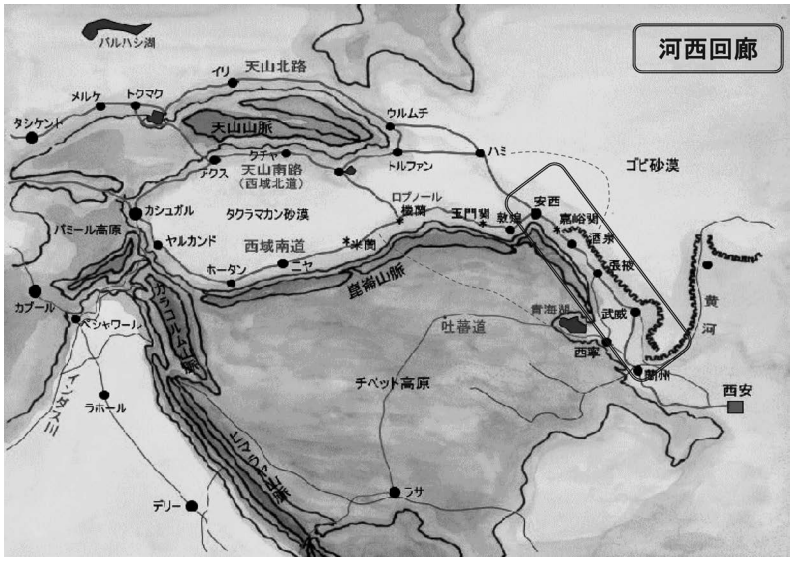
[13] 匈奴は，モンゴル系あるいはトルコ系との説がある（方位に着目した場合，トルコ系は日が昇る東から始めて南・西・北の順をとる場合が多いのに対し，モンゴル系は南を重視し南に向かったまま左を東，右を西とする傾向があったという。その意味では，匈奴はモンゴル系に属するのかもしれない（林前掲書（pp. 212–215），樺山紘一等編『世界全史』（1994年，講談社）p. 314を参照）。秦以前の戦国時代から中国の北に勢力を張っていた匈奴は，現在のモンゴルを中心に遊牧民族として東西に勢力を伸ばした（BC4世紀～AD5世紀）。この間，匈奴は西暦の紀元前後に内部分裂し，「北匈奴」は後漢に圧迫され消滅した。4世紀にヨーロッパを襲ったフン族との関係が議論されることがある。一方，「南匈奴」は，後漢に服属した。

その後，6世紀にモンゴルから中央アジアにかけて急速に支配を確立したトルコ系の突厥は，当初，モンゴルの北方（エニセイ川の上流）で匈奴の下で製鉄技術を習得し，3世紀には鍛鉄技術と優れた鉄器を利用してアルタイ山脈西南の麓で勢力を増し，6世紀後半に勢力を著しく拡大した。そして，現在のジュンガル盆地からさらに中央アジアに進出した。その支配下に置かれたソグド人は，突厥との依存関係で東西の交易（特に「絹」取引）に従事した。その頃（567年前後）の模様は，ビザンティン帝国の歴史家メナンドロス（Menandros Protector）に記録された。なお，モンゴル帝国に先立ってソグド人が築き上げた交易のネットワークは，その後，ウィグル人に引き継がれた。荒川正晴（『オアシス国家とキャラヴァン交易』山川出版世界史リブレット，2003年）は，中央アジアにおけるこのネットワークの重要性を強調している。

突厥は，その後，6世紀末に東西に分裂した。「東突厥」は，隋・唐に服属し8世紀には滅亡した。一方，「西突厥」も7世紀には唐に服属し，その後，8世紀後半には滅亡した。

[14] ステップ地帯の東側では，スキタイの後の時代には，秦及び前漢の最大の敵となった匈奴が活動を展開した。ペルシャ系のスキタイとモンゴル／トルコ系の匈奴は時代が異なり（350年ほどの差がある），地理的にも異なる（草原地帯の東西）。しかし，遊牧民として定住の地を持たず，馬・羊に頼り耕作をせず，必要に応じて長距離移動も辞さず，交易の隊商を利用・略奪すること等を含め，その特性には似たものがある。このようなスキタイと匈奴の関係（スキタイが東方に起源を持つ等）と特徴を取り扱った研究として，林俊雄『興亡の世界史02　スキタイと匈奴』（2007年，講談社，pp. 16–22）がある。同著には，東方から次から次へと現れる（主にトルコ系の）遊牧民が西進し，最後にモンゴルがとどめを刺したという草原地帯のドラマが述べられている（pp. 75–76）。

[15] AD166年にはマルクス・アウレリウス皇帝が派遣したローマ使節が長安に到達したが，そのコースは，玄奘の西方への第2，3のコースを逆にしたようなものだったのではないかという推測もある（2004年12月16日付“Economist”誌）。



出所：http://www.geocities.jp/jukutabi2/map.silk01chu.html を基に筆者の作成

第 4 図　天山北路，天山南路（西域北道/漠北路），西域南道（漠南路）とそれを束ねる河西回廊

脅かした騎馬遊牧民の匈奴が進出してきたのもこの地域であり，大月氏の前身である月氏の拠点もこの近くだった[16]。また，（前）漢の武帝が河西四郡[17]と呼ばれる防衛拠点を設けたのもここだった。

それはまた，ソグド人の交易のための重要な居留地だった。ソグド人の出自は，紀元前のアケメネス朝の時代にさかのぼる。中央アジアのソグディアナ，即ち，アム・ダリア川とシル・ダリア（Syr Darya）川の間を流れたザラフシャン川の流域であり，その中心はサマルカンドだった（図 5：「アムダリア川とシルダリア川」のマー・ワラー・アンナフル（TransOxus）を参照）。ソグド人の宗教は，ゾロアスター教，その後，仏教，マニ教，ネストリウス派キリスト教だったと言われている。8 世紀末までの段階では，ソグド人がイスラム化したという話は，寡聞にして聞いたことがない。

ソグド人の交易の活動範囲は広範に及んでいた。ソグド人は，パミール，漠南北路をへて河西に至り，東西にわたって異国情緒豊かな文物とさまざまな情報を中国（唐）とペルシャ・中央アジアにもたらした。こうして，河西は 6 世紀以降にはソグド人の主要な居留地となった[18]。玄奘も，前述の突厥の可汗との会見の途上でソグド人に会い，これを「窣利（スーリ）人」として語っている[19]。

---

[16] 月氏は，民族系列が必ずしも明らかではないが（トルコ系，チベット系あるいはペルシャ系），前漢の時代に匈奴に敗れ，その一部は大月氏として甘粛省の敦煌辺りから天山北路を経由して中央アジアのアム・ダリア川に沿ったソグディアナ・バクトリアに移り，その地で東西の交易に従事して大勢力となった。その後，1 世紀初頭にクシャーナ朝（大月氏の一部あるいはペルシャ系？，1 世紀初頭？～280 年？）に譲った（あるいは同朝によって滅ぼされた）。（月氏のうち故地の近く〈青海省の南山羌〉に残った月氏は小月氏と呼ばれた）。

[17] この四郡は，西から東に向かって敦煌郡・酒泉郡・張掖郡・武威郡となる。イスラムの歴史からみると，河西四郡の東南をほぼ平行し臨夏と西寧を中心とする「河湟〈かこう〉地域」が 17 世紀以降のイスラムのスーフィズムの動きの拠点となった。この「河湟地域」を中心に，東西に大きな帯を持つ寧夏回族自治区―甘粛省―青海省などの中国の西北地域において近代のイスラムの動きが始まった。中国ムスリム研究会編前掲書の pp. 213–217。

[18] 帯谷知可・北川誠一・相馬秀廣『中央アジア』（朝倉世界地理講座 5）所載の吉田豊「ソグド人の交易活動の実態」pp. 369–399 を参照。

[19] 玄奘〈水谷真成訳注〉『大唐西域記 1』平凡社，1999 年，pp. 56–61 を参照。

出所：http://www.karakalpak.com/stanaral.html に筆者が加筆

第 5 図　アムダリア川とシルダリア川

しかし，7 世紀には東方から勢力を伸ばしてきたトルコ系の突厥，その後ウィグルに押されるとともに，また，8 世紀に西南からソグディアナに入ってきたイスラム勢力に圧迫されたが，まだこの頃はイスラム勢力と対峙するほどの力を持っていた。しかし，751 年のタラスの戦いを経た 9 世紀には，イスラム圏の中に埋没し交易民族としての特色を失い歴史から消えていった。

大きく捉えれば，この河西回廊は，東西のみならず，モンゴルと青海・チベットという南北を結び付ける拠点でもあった。この地域は，その後の中国の歴代の王朝の西域支配において最も重要な役割を果たした [20]。

1.4　宗教伝播の経路と北方の草原路

上記の 3 コースは，宗教の伝播においても重要だった。後述のように，西方に起源を持つ多くの宗教の伝播は，ほとんどこれらのコースに頼ることとなった。

これら 3 コースのうち，タクラマカン砂漠を擁するタリム盆地の南側，北側に東西に走るコースは，紀元前数世紀前には既に存在していたという説がある [21]。仮に紀元前 4 世紀前半にアレキサンダー大王が中央アジアで絹を見たことが事実だとすれば，このタリム盆地の東西に走るコースを経たものだったのではないかと考えられる [22]。

---

[20] 松田前掲書の pp. 98–102 を参照。

[21] 浙江長城影視有限公司『絲綢之路』①，2004 年（中国重要歴史文化財遺産シリーズ）における説明。一般には，BC138 年に前漢の武帝から派遣された張騫（ちょうけん，Zhang Jian，?〜BC114 年）の話が最古のものとして理解されている。張騫は，往路は天山山脈北路と思われるコースを匈奴に捕えられるなどの苦難を伴って西進し，中央アジアのオアシスであるフェルガナをへて目的の（交易王国である）大月氏に辿りつき，帰途は「漠南路」をへて BC126 年に帰還した。

仏教では，インド人の父親と西域三六国の一つのクチャ国の王族を母親に持った鳩摩羅什（クマーラジーヴァ，Kumarajiva）（AD344～413 年）は，天山南路（漠北路）のクチャで生まれ AD400 年頃に長安に移り，仏典を漢訳し仏教の普及に貢献した。（それ以前には，西域からの渡来僧侶で月氏出身の竺法護〈じくほうご，AD300 年前後に河西回廊，長安・洛陽で活躍〉がいる。また，クチャ出身の仏図澄〈ぶっとちょう，Fu-tu Cheng，AD310 年頃洛陽に到来〉もいる。）

その後，法顕は，AD399 年に長安からインドへの往路を西域南道（漠南路）に求めている。それから 2 世紀をへて，前述のように，玄奘は 629 年に国禁を犯して密かに唐を出国し往路を天山南路に求めクチャをへて，急遽（ベデル峠を越えて）天山山脈を横切って天山北路に入り，そこで西域諸国の旅の安全を確保するために突厥の長である可汗に会見した後，さらに西に向かった。そして，中央アジアに入り，サマルカンド等をへてアム・ダリアを渡り，バーミアン等をへてインドに入った。復路は，パミール高原を越えて西域南道（漠南路）を経るコースをとった[23]。

この頃にはソグド人による東西の交易が一層進み，それを追うような形で，9 世紀頃からイスラム化したペルシャ人（波斯）とアラブ人（大食）[24]，その他さまざまな人々が，これらの陸路コースをへて中国にやってきた。

彼らには，「胡人」，「胡客」あるいは「蕃人〈ばんじん〉」，「蕃客〈ばんかく〉」等の呼称が与えられた。しかし，皆がイスラム教徒だったわけではない。イスラム以前においては，古くは仏教（紀元 1 世紀），祆教と言われたゾロアスター教（5 世紀），景教と言われたキリスト教のネストリウス派（7 世紀前半），摩尼（マニ）教（7 世紀後半）がある。これらはいずれも陸路経由だった。海陸の両経路で来たイスラム教は，どちらかと言えばむしろ後発組だったとも言えよう。

3 つのコースの他にも，第 4 のコースとして北方に東西に大きく伸びる草原（ステップ）コースがある。この草原コースは，（天山山脈北側で一部重複する所もあるが）天山北路よりもさらに北に存在した。これは，北緯 42 度から 52 度の幅でモンゴル高原（Mongolian Plateau）からポーランド・ハンガリー平原にかけて東西に横たわる約 8000 キロメートルの草原（ステップ）地帯である[25]。これを駆使したのが遊牧騎馬民族である。ユーラシアのこの草原地帯は，紀元前 1000 年頃から遊牧民が騎馬民族化するのを助け，それがスキタイ，匈奴となって活躍する場を提供した。その後，トルコ系諸族やモンゴルにも主要な通路を提供し，モンゴル帝国・元朝の時代には，キリスト教の布教等を意図するヨーロッパ人も利用した[26]。

この北方の草原コースは，最後にジュンガル（Jungar）王国の成立をもたらして，その幕を閉じた。

---

[22] 松田前掲書の pp. 16–17 を参照。

[23] 前嶋信次『玄奘三蔵』〈1952 年，岩波新書〉pp. 15–37，pp. 141–161，及び巻末の行程略図を参照。なお，玄奘の旅を前後する唐の皇帝は，第 2 代皇帝太宗（李世民）であり，唐のいわば理想的な貞観の治（627～649 年）の時代だった。その次の皇帝は，高宗（李治）だが，その在位中の 651 年に（前述の）イスラムの使節が海路経由で長安に着いた（玄奘はまだ 50 歳で存命）。その後（653 年）日本の元興（がんごう）寺の道昭が中国に渡り玄奘の弟子となっている。

竺法護，仏図澄，鳩摩羅什及び法顕の時代は，三国時代の後の普及び「五胡十六国」の時代であり，華北において多数の異民族（五胡）と王国（十六国）が乱立した。その後 439 年に北魏が華北を統一し隋の登場まで「南北朝」となるが，総じて，この時代の宗教は，イスラムの登場前なので儒教・道教（老荘思想）そして仏教が混在した。唐の時代の玄奘は，イスラムの兆候の直前に中央アジアの仏教等の繁栄に接したことになる。

[24] ウマイヤ朝については，中国側では「大食国（タージー）」と記されているが，これはアラブ人のペルシャ語表現「タジク」を模した表現であり，その名残りは現代の中央アジアの「タジキスタン」の国名にも残っている。

このジュンガルは，モンゴル高原[27]のモンゴル系（あるいはトルコ系？）の有力部族連合であったオイラート族の末裔で，1637年から1755年にかけて，ジュンガル盆地を中心にタリム盆地，トルファン盆地を含む広大な遊牧民王国を形成したが，結局は，清の乾隆帝によって滅ぼされた。このジュンガルは，最後までモンゴル高原にとどまり最後にジュンガル盆地に出てきたという特徴と，他のトルコ系諸族がイスラム化したのに対し，チベット仏教との密接な関係を保った。

2. 唐以降の東西トルキスタンにおけるイスラム

唐の時代までは，アラビア海，インド洋，ベンガル湾，そして南シナ海をへてペルシャ，アラブ等の交易船が中国に到着するのは（広東省の）広州だったが，宋以降になると（福建省の）泉州まで延びた。彼らは，居留地区を広州から長安までに広げ，また，イスラム寺院（モスク）を建立した。このように，中国とイスラムあるいは中東とを結ぶチャネルは，海陸ともに活発だった。そして，次第に出身地の意識が消え，イスラム教徒としての色彩だけがはっきり残ってきた。このイスラム信仰を持ち続けてきたのが今日の「回民」,「回族」である[28]。

この頃，中国の西北方では，唐の時代に衰えた東突厥と西突厥の後の草原地帯でさまざまなトルコ

---

[25] その中間地帯には，今日のカザフスタンやウクライナ等が存在する。この東西のコースは，古くは，ギリシャ人の黒海北岸の植民地から金の取れたアルタイ山脈へのルートだった可能性があり（林前掲書，pp. 137–138），紀元後の8〜9世紀には，イスラム商人が南からこの交易ルートに参加した（ヴォルガ川を基点としたトルコ系のハザール王国の頃）。13世紀にはいるとモンゴル族が征西に活用した（駿馬を使えば3カ月で東端から西端に達することができたと言われている）。また，12〜13世紀以降は，イスラム化したトルコ系諸族がこの草原地帯を活躍の場とした。この草原地帯は，1243年にキプチャク・ハーンの支配下に置かれたが，キプチャク・ハーン国は（同国の下で勢力を得たウズベク族がスーフィズムに影響されたこともあり）14世紀前半にイスラム化した。

その後，キプチャク・ハーン国は1440年に4分したが，イスラム教は残った（東から西に向かってシビル・ハーン国〈15世紀後半に西シベリアにイスラムを導入，1598年にロシア王朝ルーリック家の末代となったフィオドル1世によりロシアに併合された〉，カザン・ハーン国〈1552年にイワン雷帝により滅ぼされた〉，アストラハン・ハーン国〈1554年にイワン雷帝により属国化された〉，及びクリミア・ハーン国〈15世紀末にオスマン・トルコの従属国となり，1783年にエカテリーナ2世によりロシアに併合された〉）。

ヴォルガ川の河口の東西には（トルコ系とも言われるがスラブ系の要素もある）コサック人（Cossack）が居住し，軍団的要素を強めた集団として存在した。1480年にタタールの軛から脱したロシアは，キリスト教のコサック人を活用してイスラムの諸勢力と戦うとともに，ウラル山脈を越えてモンゴルのシビル・ハーン国を征服し，オホーツクまでを支配下に収めた（1582〜1649年）。さらに，19世紀後半にはコサック騎馬隊を活用して中央アジアのイスラム系のトルコ系諸族を支配下に置き，草原地帯の中央部にいわばロシア系トルキスタンを形成した。

[26] マルコ・ポーロの父と叔父（Niccolò and Maffeo Polo）が大都（北京の北）でフビライ・ハーンに会うまでのコースは，現在のウズベキスタンのブハラを経たことが東方見聞録に記されており，草原コースと天山北路を使ったと思われる。

父・叔父に伴われたマルコ・ポーロ（1254〜1324年，中国への旅は1271〜1295年）は，往路はペルシャ高原を東北に進みアフガニスタンのマザリ・シャリフに近いバルフ（バクトラ）を経てパミール高原を越えて，東トルキスタンのカシュガルに着き，漠南路を経由して大都に達した。（マルコ・ポーロ〈愛宕松男 訳注〉『東方見聞録1』〈1970年，東洋文庫〉序章4節，第2章及び p. 350の行程略図，及び岩村忍『マルコ・ポーロ』〈1951年，岩波新書〉pp. 42–52を参照。）

マルコ・ポーロに先立つヨーロッパからモンゴルへの使者は，プラノ・カルピニ（Plano Carpini〈1182〜1252年，リヨンとカラコルムの旅は1245〜1247年〉）及び ギョーム・ド・ルブルク（Guillaume de Rubruck〈1220〜1293年，コンスタンティノープルからカラコルムの旅は1253〜1255年〉）等が知られている。彼らの目的は，1241年にドナウ川まで迫ったモンゴルの脅威を恐れたカトリック教徒側からの宥和・宣教策の一環だった。彼らが辿ったコースは，モンゴル帝国の直接的なサポートを得た草原コースであり，いずれも2〜3年という比較的短期の旅だった。（ジャン-ピエール・ドレージュ〈長澤和俊監修〉『シルクロード』〈1992年，創元社〉pp. 103–113を参照。）

[27] モンゴル高原は，現在のモンゴル国と中国の内モンゴル自治区をあわせた領域に相当する海抜1000メートル以上の草原が中心になっている。その東方には興安嶺山脈とアムール川，西方にはアルタイ山脈，その北方には，バイカル湖・バイカル山脈，南方にはゴビ砂漠がある。

系諸族が割拠していた。この頃の中央アジアからモンゴルにかけてのトルコ系，モンゴル系の諸族の動きは複雑であり諸説あるため[29]，本稿では，突厥を初め（モンゴル高原を中心とした）トルコ系のウィグル，西突厥に関係するトルコ系のカルルク（Karluks），カラ・ハーン朝（Karakhanid あるいは Qarakhanid Khanate）等を，トルコ系諸族として捉えて，そのイスラム化を追う。その議論は，やや詳細となるが，これは，中央アジアのイスラム化が東トルキスタン（後の中国の新疆＜しんきょう，Xingiang＞）のイスラムに大きな影響を与えることとなるためである。

2.1　トルコ系諸族以前の中央アジア

馬・羊に頼り定住しない遊牧民のトルコ系諸族は，ジュンガル（Junghar）盆地を西に向かい天山山脈の西を通過して北の草原地帯から南方に進出した（中央アジア進出）。それは，6〜8 世紀にかけての突厥であり , それに続いて 8 世紀以降のウィグルだった。

それ以前の中央アジアでは，ソグド人の活動が知られている。特に，ソグド人は，ザラフシャン（Zeravshan）川流域を中心としたソグディアナ地域を支配し続けたが，クシャーナ朝，ササーン朝等の支配を受けた後，6〜7 世紀に一時的に突厥の支配下におかれることとなった。しかし，8 世紀以降，イスラム勢力が中央アジアに進出することに伴い，次第にイスラム圏の中に埋没していった。このイスラム勢力は，7 世紀前半にアラビア半島に新たな宗教政治形態を作り出したアラブ・イスラムが急速にその支配を広げた所産であり，100 余年の間（預言者ムハンマドの死後からウマイヤ朝の最後までの AD632〜750 年）に，東は中央アジアにおいて中国との接点，パンジャブ（Punjab）においてインドとの接点，北はコーカサス，西は地中海のシシリー島及び北アフリカからさらにイベリア半島を征服した。その背景には，アラブ・イスラム軍の意気盛んな聖戦意識と当時疲弊しきっていたビザンティン帝国とササーン朝ペルシャという事情がある。

そして，ペルシャの東北部でアム・ダリア川の手前にある「ホラーサーン」(Khurāsān，日の出の地）地域を越えて中央アジアに進出する契機となったのは，おそらく当時既に東西の交易を結ぶ経路（シルク・ロード）の重要性がイスラム勢力に理解されていたと推測できよう。そこには，ペルシャ系のソグド人のみならず（突厥の後の）トルコ系諸族と唐の影響力が歴然としていた[30]。720 年代には，（以下に述べる）マーワラアンナフールにおいてアラブ・イスラム軍は，トルコ系部族との間で激しい攻防を繰り返し，730 年代に入ってサマルカンドを征服するとともにフェルガナを抑え，最後に 751 年のタラスの戦いで唐に戦勝した。マーワラアンナフールとフェルガナの地域が再びトルコ系諸

---

[28] 張承志は，これらのイスラム教徒が信仰と母語は保ちつつも，出身地の認識を喪失し中国化する状況を唐・宋時代の「第一の喪失」と呼んでいる（張前掲書の p. 20，pp. 44–45）。なお，20 世紀に入り，国民党政府の時代には，民族として捉えるのではなく特殊な信仰と生活様式を持つ国民であることが強調された。その後の共産党政府の下では，民族としての側面を考慮し信仰を問わずに血縁的に両親の一方が回民であれば「回族」出身と認められている。（張前掲書の〈pp. ii–v〉を参照。）

[29] モンゴル系とトルコ系は，ウラル山脈以西のウラル語族（ハンガリーやフィンランド等）とはやや系統の異なるアルタイ語族に属する。アルタイ語族はさらに，トルコ，モンゴル及びツングース（Tungus）に分かれ，区別して捉えられている。尤も，語系の曖昧さ，地理的隣接による影響等，議論は決着をみていない。

[30] 以下の議論は，V.V. Barthold “Four Studies on the History of Central Asia” Leiden the Netherlands, 1956. に拠る。その一部は http://books.google.co.jp/books?id＝McYUAAAAIAAJ&pg＝PA11&redir_esc＝y#v＝onepage&q&f＝false で窺い知ることができる。

族の手に戻るのは，9 世紀のカラ・ハーン朝の成立を待たなければならなかった。留意する必要があるのは，アラブ・イスラムによるこのような中央アジアの征服がすぐにこの地域のイスラム化をもたらしていたわけではないという点である。

イスラム勢力が南方から東北に進軍してソグディアナ（アラブ・イスラム軍の侵入後はマーワラアンナフール）に入るためには，既述したように，中央アジア最大の川であるアム・ダリアを越えなければならない。（前掲の図 5：「アム・ダリア川とシル・ダリア川」を参照）。

この「アム・ダリア川の向うに広がる地域」を意味する[31]，アラブ語の「マーワラアンナフール」（Mā warā al-nahr あるいは Trans Oxus，Transoxiana）の地域，そしてマーワラアンナフールの東方で天山山脈の西端にある「フェルガナ」）盆地は，その後のイスラム勢力にとって重要な地域となった。尤も，8〜9 世紀の段階では，シル・ダリア川の北側から進入してくる（シャーマニズムの）トルコ系諸族との戦闘が絶えず，トルコ系諸族はイスラムにとって敵対する存在だった。要するに，南側（侵略的なウマイヤ朝〈AD661〜750〉と秩序派的なアッバース朝〈AD749〜1258〉）から見れば，ホラーサーン地域はともかくとして，アム・ダリア川を越えた北側のマーワラアナフールとフェルガナは危険な異教の辺境だった。

2.2　中央アジアのイスラム化

中央アジアのイスラム化については，4 つの要因があると考えられる。一つは，サーマーン朝（AD873〜999 年）の影響，次いで，トルコ系諸族側における動き，さらに，スーフィズムの影響，最後にカラ・ハーン朝の影響である。

2.2.1　サーマーン朝（Samanid dynasty）

第一のサーマーン朝については，バクダードを都とするアッバース朝を背景にしたサーマーン家が中央アジアの南部でアッバース朝の地方太守の称号であるアミールを使って，現在のウズベキスタンにあるブハラ（Bukhara）を中心に支配権を強めていた。その領土は，ホラーサーンとマーワラアナフールだった。このサーマーン朝は，ペルシャ系のタジク族が主体であり，アラブ・イスラムというよりはペルシャ・イスラムの要素を取り入れていた。その下で，ハナフィー派のイスラム法学も花を咲かせた。同時に，同朝は，トルコ系遊牧民の青少年を奴隷として訓練し，マムルーク軍人（奴隷軍人，mamluk）として南西アジアに供給し，イスラム世界がマムルークに大きく影響される端緒を作ったことでも知られている[32]。このような奴隷化されたトルコ系の人々はイスラム化し，また，集団として南下してきたトルコ系諸族もイスラムに改宗する傾向が現れた。

既に生じていた集団的なイスラム化の典型としては，カラ・ハーン朝（AD840〜1041 年，そして東西に分裂して 1212 年まで存続）とセルジューク・トルコ（Seljuk Turks，1037〜1157 年）がある。サーマーン朝を滅ぼすこととなるトルコ系のカラ・ハーン朝は，10 世紀中頃までには集団的にイスラムに改宗していたと言われている。また，アム・ダリア川下流地域からアラル海にかけての地域

[31] 帯谷知可等の前掲書 pp. 91–99 を参照。

[32] 奴隷化は，単にサーマーン朝だけでない。イスラム化した他のトルコ系諸族も，まだイスラム化していない他のトルコ系諸族と戦闘する過程で獲得した例がある（小松前掲書の pp. 162–163）。

（ホラズム，Khorezm）は，交易の要衝として歴史的にも重要な役割を果たしていた。このホラズムの住民は早くからイスラム化し，イスラム文化の花を咲かせていたが，セルジューク・トルコは，10世紀後半に東方からシル・ダリア川を越え，また，アム・ダリア下流域に移動する過程でイスラム化した。さらに，このセルジューク・トルコはホラーサーンにも進出，この地域を支配し（1020年代），余勢をかって遂に1055年に西南のバグダード（Baghdad）に入城した[33]。西方のホラズムには少し遅れて1077年に進出した。

いずれにせよ，サーマーン朝は10世紀末には弱体化し，南のアフガニスタンで興ったマムルーク系のガズニ朝[34]（Ghazni，Ghaznavid dynasty，977～1186年）と，東北に興ったトルコ系のカラ・ハーン朝に挟撃され滅亡した。サーマーン朝の滅亡は，一方でイスラム化の影響を残したものの，他方で，シル・ダリア川に押しとどめようとしていたトルコ系諸族の南下を一挙に促進することとなった。

2.2.2　トルコ系諸族の動き

第二のトルコ系諸族側における動きについては，840年のモンゴル高原におけるウィグル（回鶻）族の動きが契機だった。東突厥[35]を倒したトルコ系部族を出自とし，トルコ系諸族の中核であったウィグル国（744～840年）は，その勃興期に唐の安史の変（安禄山の変，755～763年）で唐朝を救ったが，その後中央アジアにも勢力を拡大し，また，商業に長けたソグド族（Sogd, Sogdians）を支配（あるいは提携）して絹馬貿易を展開し，ウィグル遊牧帝国を形成したかに見えた。しかし，840年のモンゴル高原の天災・遊牧民の内紛で混乱していた際に，バイカル湖（Lake Baykal）周辺にいたキルギス族の襲撃を受け，あっけなく崩壊した。

（隋・唐時代の突厥を含め）トルコ系諸族は，アルタイ山脈（Altai Mountains）南端からジュンガル盆地に出て，そこから中央アジア，あるいは東トルキスタンの地域に進出していたが，9世紀のウィグル族の移動も同様だった。ウィグル族はモンゴル高原を離れアルタイ山脈やジュンガル盆地からさらに天山山脈方面に移住を開始し，さらに西方に向かって混交・対立・征服を繰り返しながら拡散した。これに伴い，トルコ系諸族の大規模な移動が生じ，さまざまな動きを伴いながら部族集団から民族的な集団に進展していった。ウィグル族を含めトルコ系諸族は，その後東トルキスタンとなる地域（タリム盆地）を支配下に置くとともに，西トルキスタンとなる中央アジアにおいて覇権を確立し（トルコ化〈Turkify〉を進め），その中には，上記の第1で述べたようにペルシャ・イスラムを受容（イ

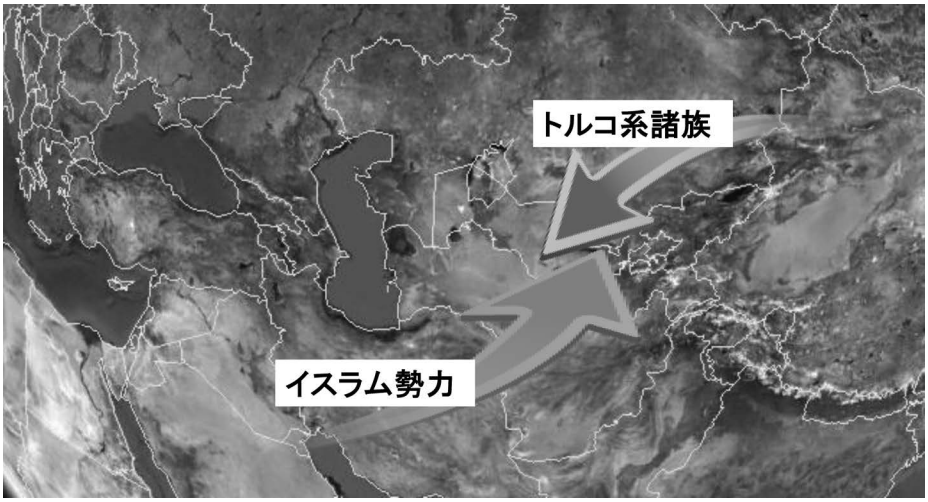
---

[33] それから約200年後の1258年に，モンゴル軍がバグダードを攻略したが，このような動きは，トルコ化が中央アジアからさらに西方に進展する背景となった。

[34] ガズニ朝（962～1186年）は，最盛時にはアム・ダリア流域からパンジャブ地方までをも領有したが，セルジューク・トルコに押され次第に衰退していった。同朝はマムルーク系を起源としておりペルシャ・イスラムの影響下に置かれていたが，中央アジアのイスラム化にはあまり影響を与えなかった。

[35] 東突厥は，6～8世紀にモンゴル高原を中心に発展した遊牧民で，東は大興安嶺まで支配し，またタリム盆地にも支配を及ぼした。そして，唐との間では友好・対立を繰り返したが，結局，内部分裂をへて744年にウィグルによって滅ぼされた。なお，西突厥は最盛期には，東はアルタイ山脈，西はカスピ海，南はタリム盆地，北はステップ地帯までを領有したが，8世紀末にはトルコ系のカルルク族，ウィグル及び唐によって滅ぼされた。その後は，東西トルキスタンにおいて，ウィグル系の諸部族が支配力を強めた。

[36] トルコ民族の動きの詳細については，杉山前掲書のpp. 245–264，及び坂本勉『トルコ民族の世界史』（2006年，慶応大学出版），〈pp. 27～34〉を参照。また，小松久雄編『中央ユーラシア史』第3章「中央ユーラシアのイスラーム化とテュルク化」，特にpp. 170–173を参照。



出所：http://maps.google.com/maps?ftr＝earth.promo&hl に筆者が加筆

第 6 図　アルタイ山脈方面からのトルコ勢力の拡大と西南からのイスラム化の動き

スラム化〈Islamized または Islamicized〉）する諸族も現れ，トルコ諸族全体としても同様の道をたどっていった[36]。（図 6：「アルタイ山脈方面からのトルコ勢力の拡大と西南からのイスラム化の動き」を参照。）

2.2.3　スーフィズム

第三のスーフィズム（sufism）は，ウマイヤ朝の形式主義的なイスラムに対抗して生じてきたもので 8 世紀頃に中東でスーフ（羊毛）の粗衣をまとったイスラムの行者に由来するイスラムの神秘主義に属すると解されている。禁欲を重視し修行・思索で神に近づき神と一体になる無我の境地を目的としたもので，古代からの宗教も影響している。スーフィズムは 9 世紀頃までバクダードが中心だったが，10 世紀にはいると体系化され，イスラムとしての正統性を議論する動きが高まり，その影響は中央アジアに及んだ。イスラムの神学・哲学の権威であったペルシャのガザリー（Ghazali, 1058〜

[37] イスラムのスーフィズムに係わる「脱魂型」とシャーマニズムに係わる「憑依型」については，岡部隆志・斎藤英喜・津田博幸・武田比呂男編『シャーマニズムの文化学』（2009 年，森話社）〈pp. 14–31，226–229〉を参照。

トルコ系，モンゴル系及びツングース系の諸族は，いずれも，モンゴル高原とその周辺の出身であり，宗教はいずれもシャーマニズムから出発していた。しかし，トルコ系がその後イスラム化したのに対し，モンゴル系はシャーマンから与えられたジンギス・ハーン（天からの支配者）の名前が示すようにシャーマニズムの色彩が強く残り，その後，河西回廊経由で伝わってきたチベット仏教に影響された。そして，ツングースは，シャーマニズムの要素が残った。後代の「金」及び「清」の出自となった女真は，文殊菩薩に関係して文殊（マンジュ）と称したという説話があり，それが満洲（マンチュウ）に改められたこと等から考えると仏教の影響を無視できない。

なお，10 世紀に北東アジアに出現したモンゴル系の契丹（キタイ〈Khitai〉，遼）は，宗教としては，古来のものに加え中国の道教・仏教によって影響を受けたが，イスラムとの関係はほとんど生じなかった。その契丹の末裔であるカラ・キタイ〈Kara，または Qara Khitai〉（西遼）は，東西のカラ・ハーン朝を抑えイスラムと対立する立場をとった。（カラ・キタイは，結局，ジンギス・ハーンに滅ぼされたが，キタイの名は，ロシア語等において，中国を指す Cathay の表現として残ることとなった。なお，元は南宋を「マンジ」と呼んでおり，マルコ・ポーロ前掲書も第 4 章 pp. 277–278 や第 5 章 pp. 26–29 等で説明している。この呼称法により，それ以降のヨーロッパ人の理解は，キタイとマンジが混乱したと言われている。）

1111 年）によるスーフィズムの正統化は，シーア派，スンニ派を越えて広まった。

イスラム化する前のトルコ系諸族の宗教は，シャーマニズムあるいは自然宗教が主体であり[37]，6 世紀以降には，ペルシャ系のゾロアスター教，仏教，（ゾロアスター教を踏まえさらに仏教・ユダヤ教・キリスト教等の影響を受けたと言われる 3 世紀以降の）マニ教等さまざまな宗教に何らかの形で接しながらも，ほとんどそれらを受け入れてこなかった。このようなトルコ系諸族がイスラムを広く受容することとなった理由は，これまでも盛んに議論されてきたが，要するに，サーマーン朝（873～999 年）（その後のホラズム朝〈Khorezm dynasty，1077～1231 年〉[38]）のイスラム商人の活動範囲の拡大と，その頃勢いを高めていたスーフィズムの影響に拠るところが大きい。

スーフィズムの影響を受けたサーマーン朝のイスラム商人は，洗練された商品・交易手法の他に，高い文化と天文・算術等の知識も併せ持って草原地帯の遊牧民と新たな定住地に赴いた[39]。当時勢いを強めていたスーフィズムは，遊牧民の古来のシャーマニズムに融合しやすいものだった。これは，シャーマニズムが天地・山河・動植物等の自然界に対する霊的な畏敬の念においてシャーマンなる霊能者をその仲介者とする素地を持っていたため，スーフィの振舞いは比較的容易に理解され，トルコ系民族のイスラムへの改宗に役立った。スーフィは，定住化した農耕あるいは遊牧民と遊牧民の支配者との間に立って，従来のイスラム法学者・知識人（ウラマー）に代わって仲介者の役割を果たしたと言われている。その過程で，民謡的な形でイスラムの思想をトルコ語で表現し広めていったことも貢献した。

中央アジアにおいては，スーフィズムのヤサヴィー教団〈Yasawi〉とナクシュバンディ教団（Naqshbandi）の影響も大きい。ヤサヴィー教団は，12 世紀初めにブハラでスーフィズムを学んだアフマド・ヤサヴィー（Ahmad Yasawi，1093～1166 年）がシル・ダリア川を越え現在のカザフスタンのオアシス都市トルキスタン（旧名はヤス，Yas）で広めたもので，その後アムール・ティムール（Amir Temur，1336～1405 年）からも崇拝された。そのヤサヴィー廟は現在でもカザフスタン共和国のシンボル的な存在として威容を残している。

このヤサヴィーは，現在でもウズベキスタン等で大きな影響力を残すナクシュバンディ教団の遠祖となった。12 世紀後半にウズベキスタンのブハラを中心に興ったナクシュバンディ教団は，ウズベキスタンのブハラから発信し，その後 16 世紀には，中央アジアのみならず中国[40]，アナトリア，インド，東南アジア，北アフリカ，ヨーロッパ等に広範な影響を与えてきた[41]。

なお，ブハラで織工・職人等の階層の間で広まり始まったスーフィズムは，14 世紀後半には（スー

---

[38] ホラズムに興ったホラズム朝（1077～1231 年）は，セルジューク朝の支配下に置かれていたイラン系・トルコ系（ペルシャ系，その後トルコ化）の王国で，ホラーサーンさらにはマーワラアンナフールへと領土を拡大したが，ジンギス・ハーンの使節を虐殺したため，その後モンゴル軍の猛撃を受け崩壊した。

[39] サーマーン朝の下では交易が盛んであり，サーマーン朝の通貨は，南ロシア・シベリアからバルト海岸に至るまで流通したと言われている（因みに，筆者は，中央アジアで今日のタジキスタンの通貨の名称「ソモニ（somoni）」の由来を聞いたことがあるが，それはサーマーン朝，あるいは同朝の全盛期を担ったアミールのスマーイール・サーマーニーに由来するという。）

[40] その影響は，後述のように東トルキスタンにも及んだ。中央アジアのスーフィズムについては，濱田正美『中央アジアのイスラーム』山川出版（世界史リブレット），2008 年を参照（pp. 56-69）。

[41] 筆者がかつて勤務した国際通貨基金（IMF）の当時のトップであるウィッテフェーン専務理事（Johan Witteveen）は，オランダの政治家出身だったが，Universal Sufism の信者として知られていた。

フィズムの導師を意味する）ホジャ（Khoja）による師弟関係を確立し，ナクシュバンディ（刺繍職人が原義）によって引き継がれた。このホジャの家系が（後に新疆となる）東トルキスタンでは重要な意味を持った。この家系は，東トルキスタンではカシュガル・ホジャと呼ばれ，その系統は預言者ムハンマドに遡ると信じられていた。こうして，中央アジアのみならず東トルキスタンにおいても，社会的に根を張ったスーフィズムは，教団の指導者の血統を尊重し，聖者崇拝を確立し，外部からの圧迫に対しては抵抗と反乱を指導するまでに至った[42]。

2.2.4　カラ・ハーン朝

第四に重要なのは，中央アジアに興り次第にイスラム化していったカラ・ハーン朝（AD840～1041年）[43]であり，それ以降，ほとんどすべてのトルコ系諸族がイスラム化し[44]，その後は他の宗教に改宗することはなかった。そして，サーマーン朝（AD873～999年）からカラ・ハーン朝に代わることによって，中央アジアはペルシャ系からトルコ系の覇権の下に置かれることとなった。そのカラ・ハーン朝を滅ぼしたホラズム朝もトルコ化しイスラム化していた。こうして西トルキスタンにおいては，トルコ化とイスラム化とが同時進行した。

このカラ・ハーン朝の出自は，840年にモンゴル高原でウィグル国が崩壊した後に台頭したトルコ系部族と解されている。天山山脈西北端の北側にあるチュー川周辺から勢力を拡大し，サーマーン朝を制圧し東西のトルキスタンを支配下に置いた。早くからイスラムに改宗しており，後に西トルキスタンとなる中央アジアとタリム盆地を中心とする東トルキスタンのトルコ・イスラム化に重要な役割を果たした[45]。

---

[42] 現代でも，イスラムの抵抗運動においては，ナクシュバンディ教団の指導者たちの影響が取り上げられることがある。

[43] カラ・ハーン朝は，東西に分裂して1212年まで存続した。漢字では，「黒汗」を当てることもある。Qara Khaqan は黒い衣装をまとったハーン，というトルコ系部族では最高位を指したものか？歴史家による便宜的な呼称なのか？中央アジアの歴史・地理では，カラ（kara，qara あるいは khara）という「黒」の形容を持つ名称が現れるが（例：Kara-Khanid Khanate〈カラ・ハーン朝〉，Qara Khitai〈カラ・キタイ，西遼〉，Kara Tatar〈カラ・タタール〉，Karakalpak（atan）〈カラカラパク，ウズベキスタン内の自治共和国〉，Karakoram or Karakorum〈black gravel，黒い砂礫，カラコラム山脈〉等々），その語源が羊毛の色，砂漠の色，帽子の色，あるいは「強い」を意味するか等は，必ずしも明らかではない。因みに，中央アジアでは，Karaqum（トルクメニスタンの大半を占める「黒砂漠」）と Qyzylqum（ウズベキスタンとカザフスタンにまたがる「白砂漠」）がよく知られている。いずれにしても，トルコ語系統では，地名に自然条件等の特徴を示す色が使われることが多い。

[44] イスラム化については，カラ・ハーン朝の君主（サトゥク・ボグラ・ハン，Satuq BoghraKhan〈?～955年〉）がサーマーン文化の影響を受けてイスラム教に改宗し（940年頃），それがトルコ系諸族のイスラム化の契機となったと言われている。次の君主〈ムーサー，Musa〉の統治下で飛躍的にイスラム化が進み，さらにそれは東西トルキスタンにも広まった。

[45] 今谷前掲書の pp. 46–49 を参照。また，東トルキスタン関係のウェブサイトは，次のように述べている。（http://saveeastturk.org/en/index.php/Turkification）“Karakhanid Uyghur Kingdom: The refugee Uyghurs moved to furthest west entered Karluks. The Karluks was established in the field locating in Western Altay mountains, Northern Tian Shan and Southern Lake Balkhash. It was originally a subordinate of the Uyghur Khaganate. In 840, the chief Karluk himself gave out Khan and Kara-Khanid Khanate was established. It is assumed that it was the refugee Uyghur who established this Khanate（Though it is confirmed that it is Turk who established the Khanate, there are various theories about the origin of the Khanate）.

This Khanate was the first Turk who accepted Islam and it deployed jihad against east and west. It became the main body to govern the western half of Tarim Basin and Turkify the central Asia along with Tian Shan Uyghur Khanate.

In 1041, it split into east and west. The Western Kara-Khanid joined suzerain of Seljuq Dynasty and it was perished by Khwarezm. In 1212, the Eastern Kara-Khanid also followed the same way and perished by Mongolia in 1211.

This is how the Eastern and Western of Pamir Mountains in Central Asia became Turkistan, where the Turk reside. Over more, western half of Tarim Basin, that was under governance of Kara-Khanid was Islamicised.”

イスラム化する以前のタリム盆地を中心とする東トルキスタンは，マニ教 , 仏教 , 景教等が併存していた。中央アジアのイスラム化が東トルキスタンに及んだのは，このカラ・ハーン朝による東方へのイスラム聖戦が進む中で，971 年にタリム盆地がカラ・ハーン朝の支配下に置かれたことを契機とする。こうして，11 世紀初めころからタリム盆地がイスラム化した。カラ・ハーン朝支配下の東トルキスタンの西半分はカシュガルを中心にホータンやクチャを含め，イスラムを受容した。しかしこの時点では，トルファン以東は依然として仏教圏だった。

トルファン以東がイスラム化したのは，モンゴルのチャガタイ汗国（Chaghatai Khanate）[46] が東西に分裂し東の君主がイスラムに改宗した（1347 年）ことが契機となったという説と，ティムール帝国時の東西のトルキスタンの統合（1389 年）を契機に急速にイスラム化が進んだという説がある [47]。また，東トルキスタンのイスラム化は緩慢であり，モンゴル帝国の下で特に東トルキスタンの東部ではイスラムは仏教と共存し，結局，仏教が駆逐されイスラム化が完了したのは 1513 年だったという説もある [48]。

3. モンゴル帝国の登場とイスラム

13 世紀に入るとジンギス・ハーン（Jinghis Khan，1162?〜1227 年）のモンゴル勢力が急速に拡大し，中央アジアの東部から西部までを侵略し，ホラズムを滅亡させ，さらに西南アジア等にも向かった [49]。このモンゴル勢力の宗教的な特色は，諸宗教に対し「一視同仁」的な立場に象徴される。その内容は，東方見聞録に記載されているフビライ・ハーン（Khubilai Khan，1215〜1294 年）の次のような言葉に示される。「全世界の人々に賛美され崇信されている 4 人の預言者がある。キリスト教徒はイエス・キリストを自分たちの神だとするし，イスラーム教徒はマホメットだと言う。ユダヤ人はこれをモーゼだとみなすし，偶像教徒（仏教徒）はサガモニ・ボルカン，即ち最初に偶像として作成された人物をあげる。余は，この四名をいずれ劣らず尊敬し崇信する。」また，東方見聞録は，フビライ・ハーンのキリスト教観についてさらに積極的な発言を引用している [50]。

モンゴルの支配者は，イスラム教徒の技術者や商人等の技術，知識，政策手腕等をフルに利用し

---

[46] チャガタイ汗国は，モンゴル四汗国の一つで天山山脈の北麓からサマルカンドとアム・ダリア川に及ぶ地域を所領としたが，次第にイスラム化とトルコ化が浸透する一方，内政は安定せず 1321 年には東西に分裂した。結局，西チャガタイ国は 1370 年にティムール帝国に占領され，東チャガタイ国は 1680 年までチャガタイの子孫が続いたがその末期にはモンゴル系のジュンガル王国（1637〜1755 年）に代わっていった。

[47] 今谷前掲書の p. 56 及び pp. 58–63 を参照。

[48] 小松前掲書 pp. 169–170。また，今谷前掲書の pp. 62–63 を参照。

[49] モンゴル族の特徴は，トルコ系とツングース系との比較で明瞭になる。モンゴル系はもともとモンゴル高原東部の小集団に過ぎなかったが，トルコ系諸族（Türk）はモンゴル高原西部・アルタイ山脈西南から興り，中央アジアからアナトリアにかけて広範囲に活躍した。いずれも騎馬遊牧民の特性をフルに発揮した。これに対し，ツングース系は，狩猟・漁猟・採集が主だった。

モンゴル系としては，13〜14 世紀のモンゴル帝国の他に，10 世紀前後の契丹〈キタイ，遼〉，カラ・キタイ〈西遼〉，タタール（Tatar），オイラート（Oirat），17〜18 世紀の最後の遊牧民王国であるジュンガル王国がある。一方，ツングース系としては，漢時代の鮮卑，宋時代の女真，満州族に加え，（モンゴル出自の）契丹を加える場合もある。他方，トルコ系諸族は言語の共通性では一つのグループとして捉えられる傾向があるものの，その中から多くの部族が興っており，古来から部族集団として内陸アジアに拡散する傾向があった。具体的には，古くは（匈奴とスキタイ。しかし，月氏は不明の点が多い。）突厥，その後，ウィグル，カラ・ハーン，ティムール帝国，中央アジア諸ハーン国，トルコ等に連なっている。

[50] マルコ・ポーロ前掲書の pp. 182–191。

[51] 小松前掲書の pp. 194–196。

た[51]。しかし，宗教では一線を画した。この点については，先に触れた張承志「回教から見た中国」が具体的に述べている[52]。結局，故地の東方ではイスラム化は見られず，中央アジア以西に進出したモンゴル族が徐々にイスラム化する動きとなった。

モンゴル族の西方における動きは，全体的に見れば，トルコ系諸族に比べれば短期的な動きに終わった。そして，モンゴル帝国も200年を経ずして解体した（1206年のジンギス・ハーンのモンゴル統一からフビライ・ハーンの末裔が殺害された1388年）[53]。

それでも，最初の100年余の間に，モンゴルはイスラム教徒の手を借りて征服地の統治を行なった。それは，ジンギス・ハーンに始まり，フビライ・ハーンの元朝でも同様だった。定住化した都市の統治・兵器の技術・治水灌漑・交易の促進等々，元朝の指導者は宋が後退した後の広大な中国を統治するために，イスラム教徒を中国の多くの地域に配置した。前出の張承志『回教から見た中国』は，「首都長安と商業港に集中した唐代のイスラム蕃客と違って，元代のイスラム教徒は，全国の至る所に住むようになった。これこそが，ついに『回回は天下に遍（あまね）し』という諺の生まれた背景であり，今の中国のすべての省，県，市に回族が住んでいる理由である。」と記すとともに，「全国各地に散在した回教徒たちは，話す言葉もペルシャ，アラビア，トルコ系諸語から中国語に変わっていった。ただイスラム教を信仰するという点で，中国の漢族と自らを区別しながら，生きてきたのである。」と述べている[54]。

さらに，張承志は，唐の時代に中国に来た交易に優れたイスラム教徒と，元の時代に軍事・行政の目的でいわば強制的に中国に移動させられたイスラム教徒とが合流する形で，中国のイスラム教徒のコミュニティのいわば基層ができたことを強調するとともに，イスラム教徒が一部の社会の上層部を形成したことを指摘している[55]。

その具体例として，先ず，オゴタイ・ハーン（Ogodei Khanate）とフビライ・ハーンの時代に大都周辺・陝西・四川において治安に優れた才能を発揮した賽典赤（サイテンチ，サイード・エジェル，Sayyid Ajall，1211～1279年，現在のウズベキスタンのブハラ出身）はその手腕を認められ，1274年に（フビライ・ハーンが征服したばかりの大理国である）雲南の行政のトップとして赴任した。そし

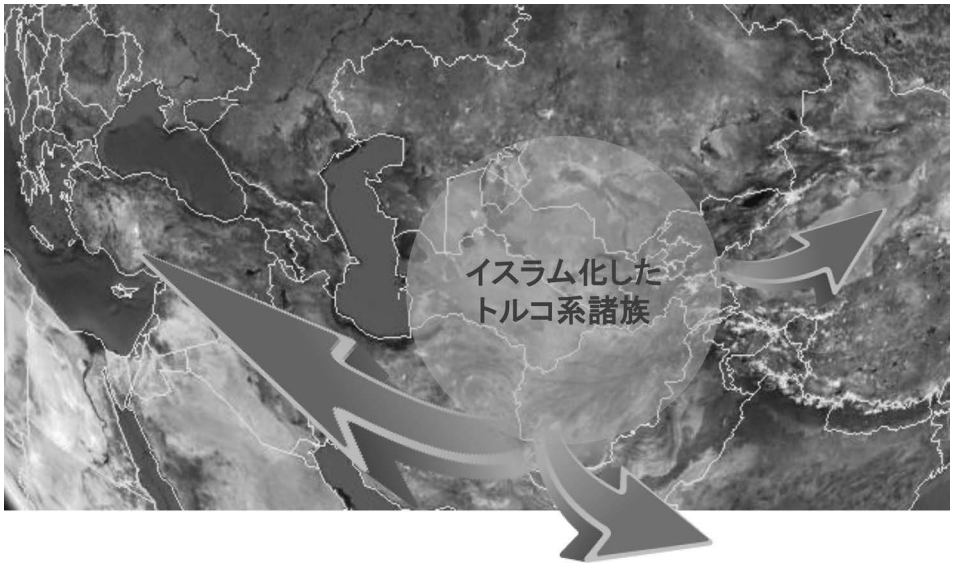
---

[52] その一例は，イスラム教では，家畜の処理は，まず宗教的な儀礼を行ない，次いで首を切って体内の血を流した後に肉を取る（クルアーンでは，「死肉，血，豚肉，及び神以外の名で供えられたもの」が厳しく禁止されている）。これに対し，モンゴルの処理法は，家畜の腹を切り心臓の血管を取り出し，血とともに肉を取る。このような生活様式の相違は，モンゴルが支配的な立場にあるときにはイスラムとの関係に厳しい差別をもたらした。したがって，（ウィグルとは異なり）モンゴルがイスラムを受容する余地はほとんどなく，モンゴル人を相手にしたイスラムの布教は厳しく禁止されていた。

[53]（オゴタイ及び）チャガタイ・ハーンは1224～1370年にわたって続いたが，14世紀前半にはトルコ化かつイスラム化が定着した。キプチャク・ハーンは1243～1502年続いたが，14世紀初頭にはトルコ化かつイスラム化した。その後，急速に勢力を増していたモスクワ公国は，1480年にキプチャク・ハーンに勝利しロシアにおける支配力を強めていった（タタールの軛の終了）。イル・ハーン（Il Khanate）は1258～1353年続いたが，14世紀にさしかかる頃，ペルシャに定住化したモンゴル部族がイスラム化したことに伴い，イル・ハーンもイスラム化した。しかし，元は1271～1368年続いたが，最後までイスラム化することはなかった。

[54] 張承志は，脚注28で触れたように「故郷の喪失」という第一の喪失に加え，元朝の滅亡後に中国にとどまり中国化したイスラム教徒の「母語の喪失」を「第二の喪失」と呼び，さらに，現代の共産党政権下における宗教統制の時代（特に，1966～1976年の文化革命の時代）に「信仰の喪失」という第三の喪失が見られたことを指摘している。（張前掲書の pp. 165–169。）

[55] モンゴル族以外については，色目・漢人・南人の階層がありイスラム教徒は色目の中でトップに位置づけられ，地方行政や裁判においては重要な任務に就くことになった。



出所：http://maps.google.com/ に筆者が加筆

第７図　トルコ・イスラムの拡大と定着

て，清廉な行政官として地域開発に努め周囲から敬愛されたため，それを慕って多くのイスラム教徒が雲南に移り住んだ[56]。

甘粛についても，元の時代にフビライ・ハーンの孫の一人である安西王 阿難答（Ananda，アーナンダ，?〜1307 年）がイスラム化に貢献した。河西回廊とモンゴル高原の治世に当たったアーナンダは、イスラム教徒の女性の乳で育ち敬虔なイスラム教徒となり，配下の兵士等 15 万人にイスラムへの改宗を命じたと言われている。

このようにして，大都にイスラム教徒が有能な人材として集まるとともに，今日の甘粛・陝西・寧夏（ねいか）・雲南等の内陸地域にイスラム教徒が定着した。元の時代にイスラム教徒が雲南と甘粛に顕著に集中したことは，その後の明・清朝以降の中国のイスラム教徒の地理的分布を考える上で重要である[57]。

対外的にも，モンゴル勢力の動きは，中央アジアのイスラム化したトルコ系諸部族を西アジアと南アジアに進出させる結果をもたらした（図７：「トルコ・イスラムの拡大と定着」を参照）。

また，沿海部では，南宋時代に現在の福建省の泉州でイスラム教徒の市舶司（税関長）がイスラム商人出身者で占められた。彼らは，南宋の滅亡後に元のために江南の平定に協力，アジアにおいて最

[56] その息子（納速拉丁，ナスル・アル・ディーン）の貢献も大きい。明の時代に大船隊を引き連れてインド洋から中東に遠征したイスラム教徒の鄭和は，その末裔の一人と言われている。なお，雲南地域は，唐の時代には南詔国，宋の時代には大理国という王国が存在したが，元の派遣した賽典赤の下で元の領域に組み込まれ，明代に定着し，清代に雲南省が設置された。そして，明代以降，漢人の移住が続き多数を占めることとなった。

[57] 因みに，2009 年現在，新疆ウィグル地区は，2160 万人の人口のうち，漢族の 41％の他，ウィグル族やカザフ族等 10 近いイスラム教徒の少数民族（総計 1300 万人）で占められている。イスラム教徒の概数を省別にみると，新疆を別にすれば，寧夏回族自治区 230 万人，甘粛省 150 万人，青海省 100 万人，雲南省 70 万人，陝西省 20 万人等になっている。（なお，陝西省の「陝」は狭い意味の「陝」とは異なる。陝西省は，中国の歴史で最も重要な渭水盆地を抱え，その省都の西安はかつての長安である。また，北部には抗日戦争中の 1937 年以降 10 年にわたって中国共産党の本拠となった。）

大の交易港となった泉州の基盤を整備した[58]。それ以降も，市舶司にはイスラム教徒が任命されることが多かったと言われている。これらが前述の「回回は天下に遍し」の要因だった。因みに，張承志は，「回族に関する誤解として，回族の源をウィグル族に求めることや，回族とウィグル族を混同することが現代でも多いので，唐代に遡っても元代に遡っても，回族がとくに同時期の仏教徒であったウィグル人とは無関係であるという点をここで強調しておきたい。」としている[59]。

こうして，後に「回民」と呼ばれる中国系のイスラム教徒の源が形成されることになった。彼らは，元代においては，いわば特権的な地位を享受しながら活躍する局面が多かったが，その後の明朝以降，イスラムを信仰しながらも，一方では中華社会に同化（漢化）し，他方では漢回対立をもたらした。

4. 明・清時代におけるイスラム

今日の中国のイスラム環境，イスラム政策の淵源は，明・清時代，特に清朝の時期にさかのぼるものが多い。明の時代においては，イスラム教徒の中国化が進んだが，「漢回対立」が生じ，回民として抑圧されることが多かった。そして，東トルキスタン（河西回廊以西）における明の影響はほとんどなかった。清の時代になると，漢回対立は激しくなり，外征・対外拡張が続く一方，西トルキスタン（パミール以西の中央アジア）からイスラムの影響が顕著となった。

4.1 明朝におけるイスラム教徒

明（1368～1644 年）の時代になり，モンゴル族がモンゴル高原に舞い戻った後も，元によって中国に定着するようになったイスラム教徒は中国にとどまった。そして，名称も言語も文化も中国化する道をたどったが，イスラム教は捨てなかったために漢族のコミュニティとは異なった集団として存続した[60]。

明朝は，当初，イスラム教徒やさまざまな人々が雑居する国際都市の北京を離れ，長江（揚子江）の南岸の南京を首都とした。朱元璋（後の洪武帝，Hong-wu-di，1328～〈在位 1368～1398〉年）は，モンゴルに対する防御を優先し，対外政策は総じて慎重だった。その後の永楽帝（Yong-le-di，1360～〈在位 1402～1424〉年）は，1421 年に北京に遷都し，北方で万里の長城を強化してモンゴル勢力を押し返し，黒竜江下流から樺太までを支配下に置いた。南方では，一時的にベトナムに進出した程度にとどまり，むしろ，南東沿海地域で倭寇に悩まされ続けた。永楽帝の時代の 1405～1433 年にかけて行われた鄭和（ていわ，Zhen He，1371～1435 年）の大航海（1405～1433 年）は，当時としては全く異例のものだった[61]。

西方では，明朝の影響力は，敦煌の北にあるハミ（哈密）より西方に及ぶことはなく，むしろアムール・ティムール（1336～1405 年）の脅威が東トルキスタンにまで及んだが，そこでは東チャガタイ・ハーン国（1340 頃～1680 年）が生き残っていた。また，西トルキスタンでは，1450 年代に，キ

[58] 前掲『東方見聞録』の 2 の pp. 114–117 を参照。

[59] 張前掲書の pp. 38–39 を参照。

[60] 明の時代の状況は，主に，http://muslimwiki.com/mw/index.php/Ding_Yanxia 及び http://muslimwiki.com/mw/index.php/Islam_under_the_Ming_Dynasty に拠る。

[61] 筆者は，この明朝の大遠征の主眼は海外貿易を厳しく規制して公的な朝貢貿易を主とするものであり，鄭和の対外活動は朝貢貿易を促進することだったと考えている。北村歳治『オリエンタル・トレード』（1997 年，日本関税協会）pp. 56–58 を参照。

プチャク・ハーン国（Kipchak Khanate）の低迷・内紛を背景にウズベク族が台頭しティムール帝国（1370〜1507 年）を脅かし，ウズベク族の分裂をへて，今日の（トルコ系かつイスラム系の）ウズベク，カザフの両族につながっていった。しかし，明朝はこのような西，東トルキスタンの動きには全く無縁だった。むしろ，東トルキスタンの北方で勢力をのばしていたモンゴル系（そしてイスラム系ではない）のオイラート族が明に侵入した時には，明の皇帝（正統帝）が戦闘の最中に捕虜になるという事件すら起きた（1449 年の土木の変）。

総じて言えば，保守的だった明朝は，15 世紀後半以降は対外的な関心が薄れ，周辺に対して内向的な立場に立った。このような中で，当時「回民」と呼ばれたイスラム教徒は抑圧され，漢姓を使わざるをえず，母語であるトルコ・ペルシャ・アラブ語等は禁止された[62]。そして，イスラムが漢語によって再表記されまた再解釈される傾向が生じ，漢化が進行し，イスラム教徒の中には科挙試験をへて官僚となるものも現れた[63]。また，明の時代に最も清廉な官吏として知られた海瑞（かいずい，Hai Rui，1514〜1587 年）は，海南島出身のイスラム教徒だった。

確かに，明朝時代には，イスラムは宗教の一つとして認められていた。しかし，中華至上主義の傾向が強かった明代においては，元朝の後ろ楯を失っていたイスラム教徒の貢献は矮小化され，社会の下層に押しやられることも多くなった。同時に，イスラム教徒に対する経済取引等の差別あるいは侮蔑的な行為等を契機に対立・内乱も生じるようになった（いわゆる漢回対立）。

4.2　清朝におけるイスラム教徒

17 世紀に差しかかると，明の辺境地帯は不安定化し，陝西（せんせい）出身の李自成が指導した農民反乱軍の後，遼東から勢力を増大させてきた「清」軍が長江を南に渡って支配を拡大した。そして，1616 年に中国のほぼ全域を平定したヌルハチ（女真族出身で帝位に就いたのちは太祖）は，1636 年に「清」を建国，1644 年に首都を瀋陽から北京に遷した。（なお，民族名は女真から満洲に改められた）。この平定の間，戦略上，海禁策（対外貿易の禁止）の強化や内部の反乱等が重なり社会経済は混乱・疲弊したが，その後の康熙帝（こうきてい，Kang-xi-di，1654〜1722 年。在位は 1661〜1722 年）の時に権力を確立し，続く雍正帝（ようせいてい，Yong-zheng-di，1678〜1735 年。在位は 1722〜1735 年）及び乾隆帝（けんりゅうてい，Qian-long-di，1711〜1799 年。在位は 1735〜1795 年）の 3 代に清は最盛期を迎えた。

清朝の時代（1644〜1912 年）には，イスラム教は従前と同様中国の宗教の一つとして認められ，当初の段階では平穏な関係が維持されていた。具体的には，清朝は，その後支配下に置いた（モンゴル，チベット，青海のみならず）新疆に対して，「藩部」という位置づけで清朝による間接統治を行ない，中国本土での「辮髪」の強要等は行わず，漢族の移入も抑制した。このような中で，17 世紀

---

[62] 堀池前掲書の pp. 48–50 を参照。

[63] 例えば，宦官としての鄭和はその一例で，永楽帝から「鄭」の姓を賜わったが，生まれた時は「馬」姓で，父親の馬の哈只（ハッジ）はメッカへの巡礼を示していたと解されている。なお，中国ムスリム研究会前掲書の pp. 202–207 を参照。

[64] 民間の海上貿易を禁止する「海禁令」と明朝の復興を企てた鄭父子との接触を禁止するための沿岸住民に対する強制移住令の「遷界令」が主なものだった。

[65] 清の時代におけるイスラム問題については，今谷前掲書の第 3 章「同治の回乱とロシアの南下」，及び張前掲書の第 2 章「重い清代の中国回教史」等に基づく。

まではイスラム教徒との関係は安定的な状況が続いた。

しかし，その背後では，清の厳しい門戸閉鎖政策[64]が内陸交易ルート，沿海地域におけるイスラム教徒の活動を低迷させることとなった[65]。また，次第に増大していった漢族の東トルキスタンへの移住と活動は，イスラム教徒の清に対する警戒感を高めることとなった。こういう動きの中で，清朝のイスラム教徒に対する干渉・圧迫は次第に強まっていった。飢饉や災害も加わり，内陸西部の甘粛・寧夏・陝西の地区に多かったイスラム教徒も雲南に逃亡した。

この時期のもう一つの特徴としては，中央アジアからスーフィズムが大衆的な動きとして清の西部のイスラム教徒に大きな影響を与えた点である。しかし，スーフィズムの影響を受けたイスラムは弾圧され，甘粛省（特にその中心である蘭州）等のイスラム教徒は，男は南の雲南へ，女は甘粛あるいは青海よりさらに西（後の新疆）に追いやられた。こうして，漢化された回民であるイスラム教徒は新たな地に生きる道を求めざるをえない状況になった。

4.3　清朝における西方のイスラム対策

対外関係の観点からみると，康熙帝（1661～1722 年）は，台湾を併合し福建省に編入するとともに，ロシアとネルチンスク条約（1689 年）を結んでシベリアと東北部との国境を確定させ，また，1696 年に北モンゴルを，また，1720 年にチベットを服属させた。そして，それを受け継いだ雍正帝（1722～1735 年）はチベット東北部の青海草原を清朝の支配下に置いた。さらに東トルキスタンではジュンガル王国と対峙した。その後の乾隆帝（1735～1795 年）は，積極的な外征を展開し，東トルキスタンのジュンガル王国（1637～1755 年）を滅ぼした後，この地域を新領土の意味で「新疆」と名付けた（1760 年）。これが今日の新疆である[66, 67]。こうして，黒竜江から新疆，チベット，台湾に及ぶ今日の中国の広大な領域が概ね確定した[68]。イスラムとの関係では，中国が初めてトルコ系イスラムが主流となっている東トルキスタンを支配することとなった。

しかし，その後の動きは，中国ならではの複雑な要因が影響して，中国のイスラム教徒の対決的な側面が前面に出てきた。具体的に見ると，第一に，中央アジアからの新たなイスラムの影響である。第二に，回民の地域の周辺に新たに移住した漢族の動きがもたらした対立である。第一と第二の結果，新疆の東側にあたる陝西・寧夏・甘粛及び雲南において回民蜂起が相次ぐことになった[69]。第三

---

[66] この地域は，広義の東トルキスタンに相当する。その後，勢力の後退を余儀なくされた清は，後述の左宗棠の活躍によって失地を回復し 1884 年に「新疆省」を設立し一行政区画として位置づけた。新たな名称として「新疆ウィグル自治区」として発足したのは，中国共産党が政権を担った後である（1955 年）。

[67] この頃，カザフ草原にあったカザフ・ハーン国は，一方で清に朝貢するとともに，他方でロシアに対しても従属する形をとった。その後，1860 年代までにカザフ・ハーン国はロシアに併合され，清朝の統治下に残ったのはイリ等に限られるようになった。ロシアがイリ周辺を一時的に占領した 1870 年代前後のイリ事件後，1881 年にイリ条約（1881 年のペテロスブルグ条約〈第 2 イリ条約〉によって領域の決着をみた。現在の新疆ウィグル自治区に「イリ・カザフ自治州」があるのはその名残りである。

[68] 国境については，清朝は中華思想を踏襲し中国は唯一の国家であり（中華至上主義），対等な国家の存在を認めず従って国境は存在しないという立場を堅持し，ネルチンスク条約（1689 年）に続いて，雍正帝の時代に外モンゴルとロシアの間の国境を確認するキャフタ条約（1727 年）が結ばれたが，いずれもロシアを朝貢国として取り扱っている。なお，新疆ウィグル自治区とチベット自治区の面積は中国では 1，2 番目に広大であり，両自治区だけで中国の総面積の 1/3 を占める。

[69] このような回民蜂起（満漢・回対立）が頻発したのは，1860 年代から 70 年代にかけてであり，内憂外患に悩まされた清朝の穆宗（ぼくそう，あるいは同治帝〈どうちてい〉，Tong-zhi-di，1856～1875 年）が帝位にあった年号の同治（どうち）の期間（1862～1874 年）とほぼ一致するため，「同治回乱」と呼ばれることもある。

は，清の東トルキスタンの領有がもたらしたトルコ系（ウィグル等）のイスラム教徒との対立である。

4.3.1　スーフィズムの影響

第一の新たなイスラム教との対立の背後には，スーフィズムの動きがある。清が領有地域を拡大した 17 世紀後半までには，スーフィズムの影響は顕著となっており，中央アジアのみならず，北アフリカ，バルカン半島，ウラル（Ural）地域，東南アジアにも広がった。中国西部の東トルキスタンも，また，河西回廊等の東の地域も，その例外ではなかった。

中国側においては，新疆の東側にある寧夏，甘粛，青海省の地域（特に，蘭州の西南・西北に当たる臨夏と西寧の河湟地域）を中心に西トルキスタン（中央アジア）からスーフィズムの動きを学ぼうとする教団組織的なイスラム教徒（門宦〈もんがん〉）の動きが現れた[70]。こうして，多くの門宦が登場したが，この動きは，漢化したいわゆる回民の中から生じたものである。

中国における上記のスーフィズムの影響は，そもそも元の時代に始まったという説もあるが[71]，本格的には清の乾隆帝の時代だった。当時最も活発な既述のナクシュバンディ派の系統であるジャフリーヤ（Jahriyah）が知られている。これは，馬明心（ばめいしん，Ma Mingxin，1719?～1781 年）が 1760 年代に中東でスーフィを学んだ後，甘粛に戻り旧来のスーフィ教団との対立・葛藤の中で新教的なスーフィズムを広めようとしたことが契機となった。馬明心の勢力は，清朝の地方役人と激しく対立し，結局，馬明心は蘭州の城上で殺された（1781 年）。その後の清朝によるジャフリーヤに対する弾圧は厳しく，その遺族を（男児は）雲南あるいは（女子は）西方に追放した。しかし，弾圧にもめげずその後もジャフリーヤの反撃は再三生じ，その過程でジャフリーヤは雲南と寧夏に根を下ろすことになり，その余波は 20 世紀まで長く続いた[72]。

4.3.2　漢回対立

第二は，回民（唐から元の時代に外来しその後漢化したイスラム教徒）の地域の周辺にいた漢族の回民に対する利害的な摩擦と差別的な行為がもたらした対立である。

清朝の時代の深刻な満漢・回対立は，同治回乱に象徴される。その遠景には，後に清朝が直面することとなった動乱の先駆となった太平天国の乱（1851～1864 年）[73] のような動きがあった。同治回乱は，清の同治年間（1862～1874 年）に，先ず雲南，次いで陝西・寧夏・甘粛・青海そして新疆を中心に生じた満漢・回の深刻な対立であり，犠牲者の数は夥しいものに至ったと言われている（雲南で数十万人あるいは百万人，陝西等でも大虐殺の対象となったイスラム教徒の数は激減した）[74]。残されたイスラム教徒は疲弊し，山地や遠隔地に追いやられた。

---

[70] 中国ムスリム研究会編前掲書の pp. 213–217 を参照。

[71] 堀池前掲書の pp. 36–41 を参照。

[72] 張前掲書の pp. 58–76 を参照。

[73] キリスト教の影響を受けた洪秀全が一神教（上帝教）を唱えて起こし，清朝打倒を宣言した大規模な反乱となったが，曾国藩唐によって鎮圧された。

[74] 今谷前掲書は，第 3 章「同治の回乱とロシアの南下」において，同治回乱の発端は「中国内部からおこした反乱という点で，従前の回教徒（ムスリム）反乱とは性格を異にする」点に言及しているが（pp. 143–144），結果としては，陝西から西方の多くのイスラム教徒の反乱につながっていったことは否定できない。

先ず，雲南における回民蜂起をみると，既に1855年から対立が始まっていた。雲南省におけるイスラム教徒については既述したが，漢族の移住の増大はさまざまな地域的な対立問題をもたらした。その一環としての錫鉱山における漢・回の労働者の衝突が発端となって，杜文秀（とぶんしゅう）という盟主に率いられた勢力が勢いを得て雲南西部の大理地域を占領し，清に対立する政権を樹立し，さらに省都である昆明（コンミン）を攻め立てた。しかし，雲南東部は清の政府軍が支配権を確立し，結局，1873年に杜文秀は清に敗れた。多くの回民の難民は，西方のミャンマー，あるいは南方のタイ，ラオスに逃れ出た。この内乱は，ミャンマーに逃れた雲南回民とその後裔がパンゼーと呼ばれたため，英語ではPanthay Rebellion（パンゼーの乱）としても知られるに至った。

次に，陝西からスタートした回民蜂起をみると，満漢・回の対立は1862年に生じた太平天国の反乱軍の一部が陝西省に侵入したのが契機となった。回民が殺害されるという噂が流布し回民蜂起が始まった。この蜂起は甘粛に広がり，さらに新疆にも広まった。甘粛では，ジャフリーヤの指導者である馬化龍（ばかりゅう）に率いられた回民の蜂起軍が甘粛や寧夏を越え青海と新疆の回民と連携し強固に抵抗し，激しい漢・回の対立が長期化し泥沼化した。清朝は，当時の指導者のトップである曽国藩（そうこくはん，Zeng Guo-fan，1811〜1872年）とともに西欧化（洋務運動）を推進した左宗棠（さそうとう，Zuo Zong-tang，1812〜1885年）を派遣して，先ず陝西で蜂起したイスラム勢力を鎮圧した。しかし，甘粛以西では反乱はますます激化した。こういう中で，左宗棠は河西回廊を西に進軍し，1870年代に入ると，さしものイスラム勢力も劣勢に立たされ清の軍に鎮圧された（1873年）。

その結果，多くのイスラム教徒は西へ逃れ，一部は西トルキスタンに逃れ出た。蘭州から敦煌に至る河西回廊の回民は希薄となり，その西方の東トルキスタンとの連携も断たれることとなった。

4.3.3　新疆（東トルキスタン）の混乱

第三は，清の東トルキスタンの領有がもたらしたトルコ系（ウィグル等）のイスラム教徒との対立である。清朝はジュンガル王国を滅ぼして（1755年）新疆地域を征服した後は，新疆のトルコ系イスラム教徒の住民の文化・生活慣習にあまり関与せず，自治的な体制をとっていた（間接統治）。当時は，この地域はイスラム教徒の地を意味する「回疆」，あるいは新領地を意味する「新疆」と呼ばれていた。

ブハラを中心としたスーフィズムの導師を意味するホジャの家系については，スーフィズムとの関連で既に述べたが，その系列のホジャが16〜17世紀に西トルキスタンからカシュガル方面に進出し，カシュガル・ホジャ家として東トルキスタンで宗教的な権威を打ち立てた。同家の関係者は清朝に友好的だったために，ジュンガル王国を倒した後，清朝はカシュガル地域の統治にカシュガル・ホジャ家の指導者を利用した。しかし，同家は次第に清朝と対立する関係となり，結局，清朝はカシュガル地域を含むタリム盆地を軍事的に占領して直接統治に踏み切り，カシュガル・ホジャ家を放逐した。

1820年代以降，ウズベキスタンに逃れたホジャ家の一族は，巻き返しを図り一時的に新疆の西部を奪回することに成功した。これを契機に，新疆に対する清朝への同化策は強化されたが，新疆におけるイスラム教徒の反乱は勢いを増し，攻防が繰り返され，それに応じてフェルガナ盆地（当時はコーカンド・ハン国）と（天山山脈の西南端を間に挟んで）フェルガナ盆地に接する新疆のカシュガルとの間で相当数のイスラム教徒の往来と移住がみられた。なお，この時代における東西の往来の主

出所：http://dvor.jp/maps.htm に筆者が作成

第 8 図　ロシアの東方進出

流は，古代のパミール以南の山岳踏破のコースと異なり，パミール以北のカシュガルとフェルガナを結ぶ山岳コースとなっていた。これは，仏教の中心がガンダーラ等のアム・ダリア川以南にあったのに対し，イスラムのスーフィズムの中心がシル・ダリア川系のフェルガナ等だったことにもよる。

この間，1864 年以降，新疆全域において事態は深刻化した。これには，前述の同治回乱の陝西省からの余波も大きく与かっている。1865 年にはコ―カンド出身の軍人であるヤクブ・ベク（Yakub Beg，1820～1877 年）がカシュガルを制覇してさらに東進し新疆の大半を支配する政権を打ち立て事態を一層複雑にした。この反乱においては，甘粛等からの回民と新疆の古くからの住人だったトルコ系イスラム教徒が連携したが，中国側の多数の回民は死に追いやられた。

清朝にとっては，このような動きは外来のイスラム教徒による者によるいわば侵略に映った。その背後には，英国とロシアのいわゆる「グレート・ゲーム」[75] と呼ばれる角逐があり，ヤクブ・ベクは英国（とオスマン・トルコ）の支持を得ていたとも言われている [76]。しかし，1876 年には清朝の左宗棠の率いる清軍の猛攻により，新疆は清朝によって再制圧された。その後，清朝は新疆省を設置し（1884 年），清朝への同化策を加速させた（中国化）。この過程で，イスラムに対する偏見と回民に対する差別的な対応が次第に深刻な問題になっていった。

この間，ロシアは南進し 1867 年に（その後中央アジアの中心地となる）タシケント総督府をおいた（図 8：「ロシアの東方進出」を参照）。清は西北からのロシアの動きに直面し瀬戸際に立たされたが，清の軍隊はロシア・モンゴルとの国境近くに以前から駐屯しており，それなりの勢力を維持して

[75] 中央アジアを中心にユーラシアの東西にわたった英国とロシアの角逐。1813～1917 年にわたり，最初は南下を目指すロシアとインド洋とインドの確保を目指す英国がアフガニスタンを巡って抗争を繰り返した。その後，1913 年に中華民国から独立を目指したモンゴルとチベットの動き（蒙蔵条約）では，ロシア（その後のソ連）が中国との関係を重視したため，英国は深入りを避けたという経緯がある。日露戦争（1904～1905 年）もこのグレート・ゲームの一環として理解できる。

[76] Herbert Allen Giles “A Chinese political dictionary” London（Retrieved in 2011）, p. 894 を参照。

いた。これに加え，左宗棠の強い指導の下に，清は前述のように新疆全域を支配することに成功した。さらに，1881 年のペテルスブルグ条約（第二イリ条約）[77] によりイリ地域をロシアから奪回した。新疆省の設立は，その後の 1884 年に行われ，その後中華民国に引き継がれ，さらに 1949 年に中華人民共和国の支配下に置かれ，1955 年に新疆ウィグル自治区となった。

5. 20 世紀以降における中国とイスラム

清朝が滅び（1911 年の辛亥革命），中華民国（1912 年成立）に移行すると，対外関係ではさまざまな問題が生じた。中国の辺境では，1913 年にチベット及びモンゴルは，清朝から開放され，中国と分離し独立国家を組織し，内外の危険に対して相互援助することを約した（1913 年の蒙蔵条約 [78]）。

しかし，中華民国政府は，チベット全体が中国領であると主張し続けた。さらに，その後の中華人民共和国政府は，1950 年に人民解放軍を中央チベットに派兵し，1951 年にはラサを占領し，チベット全土を制圧した。

モンゴルは，清朝の下で，ゴビ砂漠以北に該当する領域を外蒙古（そともうこ），南部の一帯を内蒙古（うちもうこ）として扱われていたが，1911 年の辛亥革命後，モンゴルの後ろ盾となっていたロシア政府が中華民国に配慮したため，キャフタ条約（1915 年）では外モンゴルの「自治」のみが合意された。その後，ロシア革命，日本軍の動き等複雑な情勢もあり，結局，外・内の合併には至らず 1924 年にモンゴル人民共和国が成立した [79]。

このような目まぐるしい動向の中にあっても，中国ではイスラム問題はさまざまな展開を見せた。

5.1 回民軍閥の国民党支援と新疆の動き

イスラムの問題との関係では，中華民国及び中華人民共和国（1949 年～）に移行したことと，清朝の時代に顕著になった第二（漢回対立）と第三（新疆問題）の取り扱いを考慮すると，少なくとも国家・民族・宗教の 3 視点から分析することが不可欠となる [80]。

先ず，寧夏，甘粛及び青海の地域においては [81]，「馬」姓を持つイスラム教徒系の軍事勢力が勢力を増大させていた [82]。清朝は，一方では回民（かいみん）に対し徹底した武力制裁を行なったが，他方ではこれらの軍事勢力を逆に清朝に帰順させることによって（清朝に代わって）西北地方の安定化

---

[77] 1879 年の最初の条約はロシアに譲歩し過ぎたものだったため再交渉となった。

[78] この条約（チベット・モンゴル相互承認条約，Treaty of Friendship and Alliance between the Government of Mongolia and Tibet）は，（脚注 75 で触れたように）英露間のグレート・ゲームの東進の過程で，ロシアの影響の下で中華民国からの独立を目指したモンゴルとチベットの間で締結されたものだが，英国とロシア（その後のソ連）は，相互に牽制し合ってその後の関与を差し控えたと言われる。

[79] モンゴルについては，第二次世界大戦後，中華民国（台湾）が領有権を主張してモンゴルの国連加盟に拒否権を発動し，ソ連は報復的に日本の国連加盟に拒否権を発動した。結局，日本の国連加盟は 1956 年となり，モンゴルの国連加盟は 1961 年まで持ち越された。

[80] 台湾における回民の問題（台湾への移住，中国回教協会，台湾政府による回民支援，回民の ethnic minority「弱勢族群」としての再認識）については，中国ムスリム協会前掲書の第 55 章（pp. 327–331）を参照。

[81] この頃には，陝西では回民の数は激減していた。近年，陝西省では回族の人口は 0.5％を下回っている。

[82] 中国の軍閥は，清朝下において李鴻章によるものが嚆矢となっているが，その後を継いだ袁世凱からさらに政治的に巨大なものとなり，内部での覇権争いも顕著となった。しかし，蒋介石の率いる国民党の北伐戦争で北方の軍閥は打撃を受け，国民党は共産党の影響を抑えながら 1928 年に北京を占領した。回民による軍閥は，イスラムの宗教的な権威を取り込んで回民社会への影響力を強化する意図もあり，1949 年まで中国の西北部において影響力を及ぼした。

をもたらすことを図り，回民軍閥の勢力を掌握した。その後，回民軍閥は，1928 年以降，蒋介石の国民政府との連携を保つとともに西北地域の近代化を進め，中華民国の一環として国家統一を図ることを目指した。

このような回民軍閥は，当時，国民党政府から追われた中国共産党の率いる人民解放軍（紅軍）と鋭く対立した。その結果，中国共産党は寧夏，甘粛，青海に強い影響力を及ぼすことができなかった[83]。

その過程をへて，宗教的なイスラムの信仰を強調した門宦の立場は後退した。当時の表現として「愛国敬教」があるが，これは回民の間で，中華民国という国民国家（nation state）と信仰の堅持の両立を肯定的に受け入れるというものであり，回民としての民族（ethnicity）の視点が前面に出なかったことを反映している。このような中で，中華民国の国民政府は，「五族共和」の立場を取り，「漢」,「満」,「蒙」,「回」,「蔵」（チベット）は国民として同一の立場に立つという認識をとったが,「回」が新疆のトルコ系イスラム教徒を指すのか，トルコ系イスラム教徒と中国化したイスラム教徒（回民）との関係をどうするのか，等々の問題は十分議論されなかった。いずれにしても，回民軍閥と回民の知識層は国民政府の立場に共鳴し，その結果，国民党・共産党対立（中国本土における国共内戦）後の 1949 年には，多くの回民軍閥，回民関係者が台湾に移住した。

それにも拘わらず，清朝末期から顕著になってきた漢族の回民に対する偏見は，1930 年代に根深く残っていた。中華民国の国民政府の下で，依然として回民が虐げられる衝突が続き，「侮教」事件として漢回対立が表面化していた。国民政府は，これを懸念し回民に大幅な譲歩を行なう一方，回民の指導者であった白崇禧（はくすうき，Bai Chongxi，1893～1966 年）等も回民に回漢対立の克服を強く説いた。そこには，国家と民族との間に根深い問題が隠然として残っていたことが示されている。

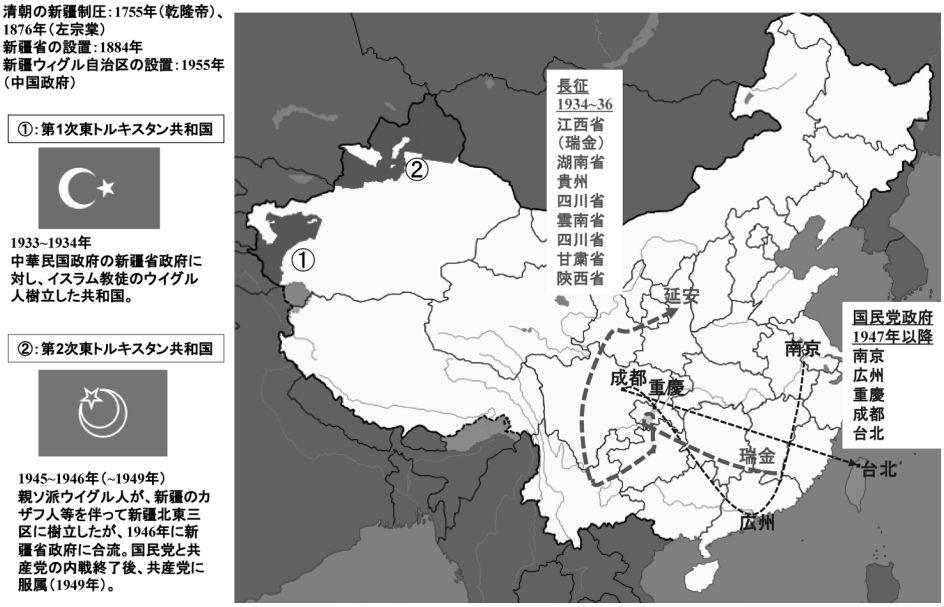
このような国民党に対し，中国共産党の立場は，民族の要素を無視することは大漢族主義であるとして非難した。後述するように，同党としては，回民を「回族」と認定し，文化・宗教の保護と「独立権を伴わない」自治を与える立場をとった。そして，共産党の勢力下にある回民（回族）とその知識層を抗日闘争に引き入れようとした[84]。そこでは，中国共産党指導下の国家，自治権を持った少数民族，そして共産党の指導に反さない範囲内での宗教が併存することとなった。しかし，1949 年の中華人民共和国の建国以降，宗教政策は厳しいものとなり，特にその後の文化革命（1966～76 年）の時期には，宗教は迫害・弾圧の対象となった。要するに，共産党指導下の国家で民族の関係がある程度明確化されたものの，宗教の位置づけが不安定であることが明らかになった。

一方，新疆では，中華民国の時代において，トルコ系イスラム教徒は，ロシアやオスマン・トルコの影響を受け自らの改革運動を開始していた[85]。そして，イスラム教徒の内部対立や新疆省政府の介入はあったものの，結社，教育，学術等の自由はある程度認められた。新疆では，漢族ではあったが雲南出身でイスラムに理解のあった楊増新（ようぞうしん，Yang Zengxin，1864～1928 年）のよう

[83] 張前掲書は，日本が満州国の次にモンゴル自治政府を推進したが，さらなる西進はこれら寧夏，甘粛における強い国民党支援的かつ抗日的な状況下では到底不可能だっただろうと推測している（pp. 107–110）。

[84] 今日の人民解放軍の前身の一つである「八路軍」においては，回民（回族）の指導者であった馬本斎（ばほんさい）が知られており，インターネット上でも中国語による多くのウェブサイトが見られる。

[85] 土屋前掲書は,「19 世紀末から，ウィグル知識人がロシアやオスマントルコに留学し，民族意識に目覚め，新疆において教育改革等による文化啓蒙活動を展開した。」と記述している（pp. 49–50）。また，中国ムスリム研究会前掲書の第 42 章（pp. 253–257）を参照。



出所：http://ja.wikipedia.org/wiki の地図等を基に筆者が作成

第 9 図　新疆，東トルキスタン共和国，中国共産党の長征，国民党の退却

な指導者が安定した施政を行なった者もいる[86]。この時期を前後して，東トルキスタンを越えて広がるトルコ系イスラム教徒を総称的に「ウィグル」（維吾爾）と呼称することが一般化した[87]。この呼称は，現在まで続いている。

しかし，その後の新疆は混乱し，新疆の最西部（タリム盆地西部のカシュガルとホータン等）でトルコ系イスラム教徒による「東トルキスタン共和国」が設立されたが（1933 年），6 カ月で国民政府の軍隊の攻撃を受け崩壊した。その後，10 年余をへた 1945 年に，新疆の北部（ジュンガル盆地）でソ連の支援を受けたイスラム系の「東トルキスタン共和国」が設立されたが，ソ連が手を引いたために 1946 年には解散した。結局，広大な新疆地域の一部において，第 1 次の東トルキスタン共和国は半年，第 2 次の東トルキスタン共和国は 1 年半の短期間存在しただけだった。（図 9：「新疆，東トルキスタン共和国，中国共産党の長征，国民党の退却」を参照。）

なお，国民党と共産党の内戦が終了した 1949 年には，新疆における国民党の勢力は中国共産党に合流した。その後の新疆は，農業開発に重点が置かれたが，その過程で中国への同化・安定化が図られると同時に，新疆は漢族の移住の受け皿となった。かつての両東トルキスタン共和国の影響はほと

[86] 楊増新については，今谷前掲書の第 5 章の詳細な記述がある。この章は呉藹宸の「新疆紀遊」（『中国辺境歴史の旅』1，1986 年，白水社）等幅広い文献に拠っているが，この他に，『江上波夫教授古稀記念論集　歴史篇』（1977 年，山川出版社）に載っている中田吉信「新疆都督楊増新」pp. 551–569 も参考になる。他方，中国ムスリム研究会前掲書の 42 章（清水百合子）は，新疆での教育改革運動を弾圧した楊増新の側面に触れている。楊増新は，1928 年に暗殺された。

[87] これは，既述した 8 世紀以降北アジアと東トルキスタンで活動的だったウィグル「回鶻」族の直系というよりも，新疆のトルコ系イスラム教徒とカザフスタンの（新疆からの移住者である）トルコ系イスラム教徒を総称するものと考えられる。このような呼称は，国民党の指導者の一人ながらも親ソ連的な立場から新疆を独立国のような扱いで統治した盛世才（せいせいさい，1892～1970 年）の影響が大きかった（中国ムスリム研究会前掲書 pp. 258–262 を参照）。なお，盛世才はカシュガルの東トルキスタン共和国を崩壊させた指導者でもあった。

んど消滅した。しかし，今日の新疆では，共産党の支配以前から芽生えていたウィグルとしての民族意識がイスラムという宗教と呼応して，さまざまな抵抗勢力となって表れている。特に，漢族との経済格差や天然ガス等の巨大開発プロジェクトに対する抵抗は顕著であり，以下に述べるような動きを展開している[88]。

5.2　中華人民共和国（共産党政権）下におけるイスラム教徒の動き

話を 1935 年頃の中国共産党の状況に戻すと，中国共産党と人民解放軍は，1934 年から始まった長征において回民軍閥から苦渋を舐めさせられた。長征の過程で民族問題に直面した経験は，回民が一つの圧迫された民族であるという認識につながっていった[89]。同時に，共産主義における宗教批判の立場から，イスラム教を「回族」と切り離し，回族の民族としての要素に着目して，圧迫された階級・民族としての回族を解放することを強調した。こうして，寧夏，甘粛及び青海を中心とする回民は宗教的少数民族の「回族」という民族として認定された。そして，共産党は革命に対する回族の支持を得るべく（民族独立は否定したが）「民族自治」を提唱した（前掲の図 9「新疆，東トルキスタン共和国，中国共産党の長征，国民党の退却」を参照）。

このように，中国共産党は 1949 年に支配権を握る以前においては，イスラム党の宗教勢力に対して慎重かつ友好的に対処し，回族の指導者等との接触を重視していた。しかし，1949 年の建国後は，イスラムの問題は土地改革・農業集団化の理解の相違等の理由により，共産党の政策に反する動きは激しい攻撃対象となり，反対する者は共産主義を学習させられ，宗教統制は厳しくされた。そういう中で，1953 年には，中国回教（イスラム）協会が設立され，中国のイスラム教徒に関係する少数民族である回族，新疆を中心とするウィグル族，カザフ族，ウズベク族等が参加することとなった。また，1954 年の憲法では，中華人民共和国は統一的多民族国家であることを明確にし，少数民族が集中的に居住している地域での自治を尊重する方針が打ち出された[90]。

これを受け，1955 年には，少数民族問題に対する中国政府の基本が確立し，「省」レベルの「自治区」を活用する形で[91]，「寧夏回族自治区」と「新疆ウィグル自治区」が設けられ，その下のレベルに，「回族自治州」と「臨夏回族自治州」という州を設け，さらに「州」レベルの下に，多数の「回族自

---

[88] その後の動きについては，毛里和子教授の諸著作，及び，王柯『東トルキスタン共和国研究―中国のイスラムと民族問題』（1995 年，東京大学出版会）等を参照。また，中国の民族問題を含めた包括的な議論は，王柯『多民族国家中国』（2005 年，岩波新書）を参照。さらに，アジア政経学会『アジア研究』Vol. 49, No. 1 所載の新免康「新疆ウイグルと中国政治」pp. 37–54 を参照。

[89] 張前掲書は，中国共産党の「回回民族問題」という文書が「中国の回教徒，すなわち『回回』『回民』と呼ばれている人々のことを，一つの民族として認めた」点を強調していることを指摘している（pp. 140–141）。

[90] 格日楽「中国の地方制度における自治の必要性について―地方の現状と課題の視点から―」『一橋法学，9(1)』（2010 年，一橋大学，pp. 227–246。

[91] 中国の地方制度においては，いわゆる一級行政区画として「省」，「自治区」，「直轄市」があるが，その下の行政単位として「地区」，「地級市」及び「自治州」があり，さらにその下に「県」，「県級市」，「自治県」，さらにその下に「郷」，「鎮」等がある。イスラム教徒の観点からは，新疆ウィグル自治区と寧夏回族自治区の 2 つの「自治区」，次いで甘粛省下の臨夏回族自治州，新疆ウィグル自治区下の昌吉回族自治州・クズルスクルグズ自治州・イリカザフ自治州の 4 つの「自治州」が関心を集めている。かつて，回民（回族）の存在が重要だった陝西省の回族人口は 0.4％に過ぎなくなったが，甘粛省全体としては 5％，青海省の回族人口は 16％となっている。回族人口シェアが 1％を越えているのは河南省（1％），湖南省（1％）及び雲南省（1.5％）。また，自治区レベルでは，新疆ウィグル自治区はウィグル族 45％回族 5％であり，寧夏回族自治区は回族 20％となっている。（http://www.nxny.gov.cn/）

治県」を存在させることとなった。だが，自治区の行政等の報道については，公式メディアは中央から統制されておりイスラム教徒の言論の自由は限られている。そして，自治のメカニズムも，自治区政府のトップは回族出身だが自治区の共産党のトップ（書記長）は漢族というケースが一般的である。多くの場合，共産党の指導の下で自治が進められるとともに，民族間の対立等の調整にも共産党が関与している。

この自治制は中国政府の少数民族問題の認識から出発しているが，しかし，その少数民族が宗教に結びついている場合には，問題はややこしくなる。チベットはチベット仏教に直結するため，宗教的な紛争が起きた時には武力介入が往々にして起こりうる。イスラム教の場合でも同様である。1962年には，中ソの対立の中で，数万人のウィグル人，カザフ人がソ連側に脱出した。また，文化革命（1966～1976年）の時も，チベット仏教に次いでイスラム教が弾圧の対象となった[92]。そして，1966年当初から文化革命は自治区に波及し，モスク（清真寺）は破壊され，極端な場合は，イスラムの教えに従って土葬にされた遺体が掘り起こされ改めて火葬にされた例もあったという。

文化革命が終わった1978年の中国共産党大会後に，信仰の自由を尊重する政策が再開された。1980年代に入り，鄧小平（とうしょうへい，Den Xiao-ping，1904～1997年）主導による対外的な改革開放の本格化とともに伝統文化の復興とイスラムの宗教活動が広く容認されるようになった。同時に，文化革命で排除されていた人々も復帰し，宗教事務所等の行政機関も再編され，また，近代的なイスラム教育も始まった。さらに，メッカへの巡礼も認められるようになった。

それでも，1989年の天安門事件の直前にはイスラム教に対する侮蔑行為（食生活・習慣等に係わるもの）を契機に，北京でイスラム教徒のデモ行進があり，山東省でもイスラム教徒と警察の間で衝突事件が生じた[93]。

新疆ウィグル自治区は，既述の2回にわたる東トルキスタン共和国の経緯を持つ地域だけに，1949年の中華人民共和国の建国以前から被抑圧のウィグル人の抵抗が根強く続いている。1985年以降続いていた抵抗は，1989年のいわゆる「ウルムチ事件」となった。1990年にはクズルス・クルグズ自治州でいわゆる「バレン郷事件」が生じ[94]，イリ・カザフ自治州でも1997年にウィグル住民と警察当局の間で激しい武力衝突が生じた。2000年代に入っても中国政府とウィグル族との間で対立が続き，弾圧も激しさを増していった。その後，2008年には，新疆ウィグル自治区のホータンでウィグル住民と警察当局に間で再び衝突が生じた。2009年には，新疆ウィグル自治区の最大の都市ウルムチでウィグル住民と警察当局の間で再び激しい衝突が生じたが，これは（中国の南東端の）広東で働いていたウィグル労働者に対する仕打ちの情報に怒った（中国の西北端の）ウルムチの住民の行動だった。

このような中で，中国政府は，2004年に政策目標として「社会主義和諧社会」の構築を打ち出した。これは，2003年にスタートした胡錦濤政権が，共産党指導の下に中央・地方，各民族間等の調和を推進することを目的として，漢族とウィグル族の和諧，経済格差の是正，教育の推進を図るというも

[92] 1966年から1975年まで続いた雲南の沙甸（サディアン）事件はその中でも有名である（http://laojiubao.wordpress.com/2008/10/27/）。

[93] これらの事件は，「侮教事件」と呼ばれる。

[94] 反漢族運動と東トルキスタン共和国樹立を主張する大規模な蜂起が生じた。これに類似したホータン事件が1995年に生じている。

のである。背景には，改革開放政策に起因する経済格差や地域格差が拡大したことに対する政府指導者の強い危惧があった。

2013 年 3 月にスタートした習近平政権の民族政策・ウィグル政策の具体像はまだ浮かび上がってこない。2013 年 3 月の全国人民代表会議（全人代）の時にも本稿を書いている間にも，2013 年 4 月には新疆カシュガル地区で，また，6 月にはトルファン地区で，武装集団と警察官らとの衝突事件が報道された。原因，対処を含む詳細は，まだ明らかになっていない。

おわりに

中国のイスラム問題については，次のような特異性を示すことができる。第一に，中国はイスラムの勃興の時代から現在に至るまで，直接間接にイスラムとの関係を持ってきた。これは，世界でも稀有な例である。第二に，その間にあって，中国には海洋経路で広東等を中心に移住してきた人々，トルコ系諸部族の移動に伴って移住しその後イスラム化した人々，元の時代にいわばテクノクラートとして中国に定住した人々（これらの人々は回民・回族を形成してきた），近代以降中国国境を越えてフェルガナ，カザフ等との往来を経験した人々等（これらの人々は，新疆に定住していた人々とともに，ウィグルを形成する），さまざまな背景を持つイスラム教徒がいる。これらのイスラム教徒は，常にマイノリティの存在だった。

第三に，中央アジア（西トルキスタン）と新疆（東トルキスタン）との間のイスラムの関係は，10 世紀以降の歴史的な背景の下で，18 世紀以降，中東とはほぼ無縁の形の特異なものとして展開した。それは，ユーラシアの内陸としての地域的な特色，スーフィズム，ウィグル，中央集権的な中国政府という要素の組合せで，激しい攻防を伴って織りなされた。第四に，これらのイスラム教徒に対する対応は，唐の国際性豊かな対応から今日の少数民族政策に至るまで，紆余曲折をへてきた。そこには，時代を超えて，古代の方がむしろ知恵と寛容に富んだものだったのではないかというインプリケーションすら感じさせる。

このような動きを，政府，民族，及び宗教（文化）という 3 つの視点からみるとどのような議論になるのだろうか。

多くの場合，現代の国家（政府）は，“nation state”の前提の下で政教分離・無差別・経済重視の政策を展開している（もちろん，その内容には相当の多様性がある）。“nation state”の例外として複数民族を抱える場合には，民族間の自主性・平等の尊重を基本としている。宗教（文化）については，基本的には政教分離（secularism）の原則の下に「信仰の自由」，「表現・行動の自由」を認め，個人の内面には立ち入らない立場をとっている。中国においても，このような理念型は共有される余地はある[95]。その理念型は必ずしも単一の解に帰結するのではなく，それぞれの国・社会の歴史的な経緯を踏まえ，知恵と寛容の次元で，複数解ということは十分考えられる。問題は，政府，民族及び宗教（文化）の間における実態的な関係であろう。

政府（中国の場合は即共産党政府）については，少数民族が特定の宗教（文化）にこだわる場合に

[95] 憲法との関係等については，中田吉信「中華人民共和国の宗教政策―イスラム教界の対応を中心に―」（1985 年，国会図書館『レファレンス』409 号〈1985-02〉），また，関口泰由「中国共産党政権下における宗教―宗教政策を中心として―」（2004 年，日本大学大学院『総合社会情報研究科紀要』No. 5）が詳しい。

は，政府の関与が行き過ぎれば，3 者の関係はきわめて不安定になる。これは，ウィグル族をはじめとするイスラム教徒の少数民族に当てはまる。新疆ウィグル自治区等の場合，政府の関与は，漢族の参加を伴う経済発展を標榜しているものの，その実態は一党独裁的な体制の下で上から下への一方的なものとなっている。それは，政府の意図にかかわらず宗教（文化）に食い込んでおり，政府，民族及び宗教（文化）の関係を著しく損なっているように思われる。

新疆のウィグル族等の少数民族の目には，中央政府も地方政府も漢族に寛大過ぎ，また，実際には侮蔑的差別を容認するきわめて不安定な存在として映っている。それは，政教分離に対する不信につながっている。確かに，政府のスタンスは，これまでのイスラムの歴史的な経緯を踏まえて，形式的には慎重かつ警戒的なものであり続けよう。それは，信仰の自由は認めるけれども，宗教を利用した破壊活動，教育妨害，外国からの支配等を厳しく禁止する，というものである。しかし，実際には少数民族への強引な対応となっているように見える。それでなくても，伝統的な宗教以外の新興宗教は厳しく規制されており，仏教・道教の要素を取り込んだ健康法と言われている法輪功（Falun Gong）も，外国人の目には理解できない違法対象とされている。

どこからどこまでが宗教行為なのか，また，どこからどこまでが民族的な自主的行為なのか，等々不透明な側面は，中国が厳しい統制国家だけに，ますます国際的な関心を呼びやすい。イスラム少数民族の行動に対する中国政府の対応は，宗教に抑圧的な側面が前面に出れば，国内の他地域や国外のイスラム教徒は看過しない。民族に抑圧的な側面が前面に出れば，国内の 50 余の少数民族は過敏に反応し，周辺地域にすぐ反響が現れる。これを恐れて小数民族自身の祖先・王朝の動向等に関する歴史的な議論や認識は，政府の捉え方を越える民族観につながるとして事前に厳しく監視されている[96]。少数民族独特の歴史観・民族観は厳しく拒否され，政府の教条主義的な側面が漂っている。それも，政府，民族及び宗教（文化）の関係をきわめて不安定なものとしていると考えられる。

今日の中国においては，文化革命以降のイスラム回帰の志向は，回族・ウィグルのイスラム教徒にとって微妙な意味合いを持っている。その志向は，回族だけ見ても事情は単純ではない。また，新疆のウィグル族と言っても，それは便宜的な呼称であり，その中にどのように異なる宗派があるのか，宗派間の関係・対立はどうなっているのか等，必ずしも明らかではなく，潜在的には複雑であろう[97]。さらに，宗教的な侮蔑行為（侮教問題）に対する反発は，単に新疆を中心としたウィグル族だけの問題ではなく，中国に広範に存在する回族の中にも見出されるものであり，それが相互に呼応する可能性もある。さらにまた，回族以外の諸族への影響，あるいはまた，国外のイスラム教徒との呼応もありうる。

勿論，新疆ウィグル自治区にしても寧夏回族自治区等にしても，イスラム回帰の高まりとは逆に，宗教を離れる若者の数も次第に増加していることも事実であろう。漢族の移住の増大の一方，少子化政策に拘束されないウィグル自治区等では，イスラム教徒数の将来的な増加という潜在的な問題もある。漢族との対立は複雑な様相を持つ。

---

[96] 中国ムスリム研究会前掲書の第 52 章（pp. 307–311）に記されているトゥルグン・アルマスのウィグル族に関する歴史書の発禁処分はその例であろう。

[97] 中国のイスラムは，スンニ派が大宗をなしているが，その中でもスーフィの影響を受けた幾つかの宗派が対立を繰り返し，また，その時々の政権に宥和的あるいは批判・敵対的なスタンスを取るのかどうかは予断を許さない。

1970年代末の改革開放後も続くイスラム教徒と対立事件は，今日ではインターネットに載り短時間のうちに世界を駆けまわり，さまざまな反応をもたらす。2009年のウルムチの衝突は，広東にいたウィグル労働者に対する侮蔑的な仕打ちの情報に反応したウルムチの住民の数日後の行動だった。最近の生々しい情報も世界ウィグル会議（World Uyghur Congress）等のウェブサイトを通じて，瞬く間に全世界に伝達される[98]。むしろ夥しい情報量によって，的確な判断が困難になる時すらある。

2010年12月にチュニジアで始まった「アラブの春」は，チュニジア発の情報がインターネットを通じて複雑に変容した結果であり，「情報」がどのように事実を越えて予想外の結果をもたらすかを今日的な意味で考えさせる意味を持つ[99]。情報化の世界では，小さな問題が国家を超え一挙に国際的な問題になりうる。新疆のウィグル人，あるいは回族のイスラム教徒は，中国内で相互にネットワーク・コミュニケーションをとれる状況になっているのみならず，海外とのネットワーク・コミュニケーションも東南アジアにとどまらずに中東や欧米にまで及んでいる。それは，ローカルが一挙にグローバルになるネットワークとして捉える必要があろう。

19世紀後半の雲南からミャンマー等へ逃れたイスラム教徒，新疆においても清朝の迫害を避けてカシュガル地域からは天山山脈とパミール高原の間の山岳地帯を越えてフェルガナ盆地に逃れた「カシュガル人」，また，タリム盆地とジュンガル盆地に挟まれた新疆の西北端にあるイリ盆地からもウィグル人が清朝支配を嫌ってカザフスタンに移住したこともあった。逆に，1917年のロシア革命後には，ロシアの混乱を避けて新疆に移住するウィグル人もいた。

1950年代後半以降は，ほとんどが中国からの逃亡のように思われる。中国共産党支配の新疆から国境を越えて西に（西トルキスタン）移住したウィグル人の例として，人民公社の運動が展開された大躍進政策に伴う飢饉と社会混乱のために，ソ連邦内に移住したウィグル人がいた。特に有名なのは，1962年の「イリ事件」の際には数万人のカザフ人とウィグル人が新疆からカザフスタンに逃げ込み，これを契機に中ソ国境は1980年代まで閉鎖された。このような事態は1980年代末以降に改善され1991年のソ連崩壊後は，新疆とカザフスタンの間ではウィグル人とカザフ人の往来が活発になった。カザフスタンの場合，新疆その他国外にいるカザフ人の「呼び寄せ政策」を展開している所もある[100]。

このような事情を背景に，ウィグル人については，「ウィグル・スタン」樹立の動きも見られたが，中国及びカザフスタンの両サイドで厳しく監視されている。現在，ウィグル人は，新疆に1002万人いる他，カザフスタンに22万人，そしてキルギスタンに5万人いる。新疆と国境を接している中央アジア諸国は，ウィグル人を危険視している面もある。

その一方，新疆の外にいるウィグル人は，既述の東トルキスタンの認識を併せ持ちながら海外においてウィグル人のための国際活動を展開している。さる2012年5月には，東京において前述の世界ウィグル会議（第4回会議）が開催されて注目されたが，中国政府は，このような動きを内政干渉と

---

[98] 世界ウィグル会議のウェブサイトは，日本語：http://www.uyghurcongress.org/jp/　英語：http://www.uyghurcongress.org/en/　がある。

[99] 詳細は，保坂修司「ベンアリー最後の日々―アラブの春とメディア」（2012年，早稲田大学イスラム科学研究所『イスラム科学研究』第8号 pp. 49–66. を参照。

[100] 岡奈津子「祖国を目指して―在外カザフ人のカザフスタンへの移住―」，岡奈津子編『移住と「帰郷」―離散民族と故地』第1章（調査研究報告書　アジア経済研究所2008年）

して非難している。いずれにしても，中国のイスラム問題は多様である[101]。

中国におけるイスラムの問題は長期に及ぶだけに，ここでは触れることができなかった夥しい文献がある。ただ，日本における中国史の主流の文献は，中国のイスラム問題を小さな取扱いにとどめているのが普通であり，中国史のいわば入口である尾形勇・岸本美緒編の「中国史」（2006 年，山川出版）でも，その関心は中国の沿海部，あるいは中原が中心であり，西北地域は全くの辺境的な位置づけになっている。しかし，中国におけるイスラムの影響は予想以上に根深く，今日への多くのインプリケーションを持っている。また，今日の情報化社会では，イスラムの問題がローカルな問題に終わることなく，逆に国際的にさまざまなインプリケーションを持つことを考えれば，隣国である中国のイスラム問題について，その背景となる歴史的，社会的，文化的な理解を的確なものにしておく必要があろう。

[101] 2012 年 5 月 13 日に北京で行われた「第 5 回日中韓首脳会議」において，日中の首脳会談が行われなかった理由の一つに，翌 5 月 14 日から東京で開催された「世界ウイグル会議」に中国が強く反発したのではないかという当時の報道が見られた。なお，独立か高度な自治権獲得については含みが残るが，ウィグルの「独立した政治的前途の獲得」を主張する「世界ウイグル会議」とは別のグループも存在する。例えば，亡命ウィグル人が組織する「東トルキスタン亡命政府」は，中国からの明確な独立を主張している。